

修士論文
平成13年度

母語話者との相互行為における非母語話者のスピーチレベルシフト
- frameとknowledge schemaの観点から -

お茶の水女子大学大学院
人間文化研究科 言語文化専攻
日本語教育コース

OHRI RICHA

目次

本研究について 1

研究の構成 2

第1章 先行研究

1.1 母語場面におけるスピーチレベルシフト 3

1.1.1 母語話者同士の会話におけるスピーチレベルシフト 3

1.1.2 教室談話・グループ討論場面におけるスピーチレベルシフト 5

1.2 接触場面におけるスピーチレベルシフト 7

1.3 まとめと本研究との関連性 10

第2章 研究課題と研究方法

2.1 研究課題 13

2.2 研究方法 13

2.2.1 談話研究における社会言語学的なアプローチ 13

2.2.2 本研究の方法論的な位置付け 14

2.3 対象現場及びデータ収集 16

2.3.1 対象現場 16

2.3.2 対象現場の特徴 16

2.3.3 対象者 17

2.3.4 各回の情報 17

2.3.5 データの種類 18

2.3.6 文字化記号の説明 19

第3章 分析結果と考察

3.1 分析方法 20

3.1.1 分析の枠組み 20

3.1.2 分析の観点 22

3.1.3 分析基準 23

3.2 分析結果 - 全体活動フレームにおけるスピーチレベルシフト - 24

3.2.1 On Stage frame の場合 24

3.2.2 Off stage frame の場合 28

3.3 考察 46

3.3.1 On stage の場合 46

3.3.2 Off stage の場合 49

第4章 結論と今後の課題

4.1 結論 54

4.2 今後への示唆 54

4.2.1 スピーチレベルシフトの研究への示唆 54

4.2.2 日本語教育への示唆 55

4.3 今後の課題 56

参考文献 58

本研究について

言語は文化の中で多様な性質をもち、会話は創造的に作りあげられる共同的なプロセスと言える。ひとつの社会の中でも、社会集団によって、さらには同じ社会集団でもメンバーによって、談話は異なる。実際、同じ人物でも様々に異なる多様な談話に関わっている。主に、文学批判の分野で活躍した Bakhtin, M. (バフチン) は、社会的「言語的多様性」 - 目的や様式が様々に異なる多重な談話によって構成される社会 - という概念を導入して必要な複雑性をあつかう道を開いた。そこでは例えば、日本語が話されるのではなく、様々な日本語が話されるのである。では、現在の日本社会の状況を考えてみよう。日本語でコミュニケーションをする非母語話者が年々増加している。この現象が日本社会の構成を変えつつある。今後の日本社会は、日本語母語話者と非母語話者が共に協力し合って作っていく社会になっていく、と思われる。こういった状況の中で、非母語話者の話す日本語が母語話者との相互行為においては重要な意味をもっている。日本語教育もこのような現状を緊急課題として取り扱わなければならない。その一助になることを願う本研究は、母語話者との相互行為における非母語話者の話す日本語に焦点を当て、そこに潜んでいる社会的な事実を明らかにしようとするものである。こういった社会的な事実の解明こそが、母語話者と非母語話者のコミュニケーションを円滑にさせるために大切である、と考える。

母語話者は、会話を円滑に進行させるため、様々なストラテジーを用いるが、その中の1つとしてスピーチレベルをシフトさせることが挙げられる (Hashimoto, 1992; 宇佐美, 1995)。母語場面におけるスピーチレベルシフトの要因や機能を論じた研究は数多くある。しかし、相互行為における非母語話者のスピーチレベルシフトはどんなものなのか、また、その機能は何なのか、という課題は未だに明らかにされていない。

そこで、本研究は、グループ討論場面における非母語話者のスピーチレベル及びシフトを解明することを目指した。非母語話者の言語形式にとどまらず、彼らが用いることばのプロセスを記述するため、エスノメソドロジック的談話研究の方法論を用いた。また、現場重視のアプローチをとり、グループ討論場면을説明するため frame (Bateson 1954, Goffman 1974) の概念を用い、全体活動フレームを on stage frame と off stage frame に分けて分析結果を検証した。母語話者と非母語話者の相互行為における divergent knowledge schema (Tannen, D. 1993) の概念が重要な意味合いをもっていると思われるため、それを用いて考察を行った。結果として、1つの社会的な事実とも言えるものとしては、相互行為における power relations の存在が明らかになり、それがスピーチレベルシフトに与えている影響を指摘することができた。

本研究で得た結果から、スピーチレベルシフトの研究への示唆として、非母語話者のスピーチレベルシフトに焦点を当てた研究の必要性、研究のアプローチの検討の必要性、対象現場の特徴を重視した研究の必要性、の3つを挙げた。また、日本語教育への示唆

として、母語話者と非母語話者の相互行為の現場を増やす必要性と、Power relationsの存在についての自覚、の2つ述べた。

以上、本研究を簡単にまとめた。次節に、本研究の構成を述べる。

研究の構成

本研究では、グループ討論場面の自然談話を対象に、非母語話者のスピーチレベルシフトを検証し、その機能を明らかにすると共に、母語話者と異なるスピーチレベルシフトが検証された場合、その要因と機能も述べることを目的とする。研究構成としては、第1章のスピーチレベルシフトの先行研究では、まず、母語場面における2者間の対話を対象にスピーチレベルシフトについての研究の生田・井出(1983)、Hashimoto(1992)と宇佐美(1995)をまとめた。次に、2者間以上のグループ討論場面を対象にした研究の森下(1998)と杉山(2000)、教室全体の談話を資料にスピーチレベルシフトを論じた研究の岡本(1997)をとり上げた。さらには、日本語を母語としない日本語学習者の用いるスピーチレベルの実態を調査した研究の上仲(1997)、佐藤(2000)をとり上げ、最後に、本研究との関連性と本研究の主張を述べた。ここでは、上述した先行研究から浮かび上がる問題点を指摘し、本研究の意義を述べた。

第2章では、グループ討論場面における非母語話者のスピーチレベルシフトを明らかにするため、課題1:上級非母語話者の全体活動フレームにおけるスピーチレベル及びそのシフトはどんなものなのか。また、そのスピーチレベルシフトが談話進行上、いかなる機能を持っているのか。課題2:母語話者とは異なる要因でシフトしているのか。しているとしたら、それはどんなものなのか。また、その機能は何なのか、の2つの課題を設定した。次に、この2つの課題を研究するため、エスノメスドロジック的談話研究の方法論を用いる必要性を述べた上で、対象現場の特徴を記述した。

第3章は、分析方法と分析結果と考察の2つの部分で構成されている。分析方法では、本研究を進めるに当たって重要と思われるframe/knowledge schemaの概念を説明した。本研究の対象となったグループ討論場面の中の全体活動フレームをon stage frameとoff stage frameに分け、生田・井出(1983)のスピーチレベルシフトの3つの要因の枠組みを借りて非母語話者のスピーチレベルシフトを説明した。また、生田・井出の枠組みで説明できないものをpower relationsの新しい観点から説明を試みた。最後に、knowledge schemaの概念を用いて非母語話者のスピーチレベル及びシフトを考察した。

第4章では本研究の結論となるものを述べ、この研究から得られた知見をもとに、スピーチレベルシフトの研究への示唆と、日本語教育への示唆をそれぞれ述べた。

第1章 先行研究

本研究は、グループ討論場面における上級非母語話者のスピーチレベルの選択及びそのシフトに着目し、どのように母語話者と会話を進行させていくのかを明らかにしようとするものである。本章では、スピーチレベルシフトに関する先行研究を母語場面と接触場面に分けて述べていく。まずは、母語話者同士の会話におけるスピーチレベルシフトとその機能についての先行研究をまとめるが、2者間の対話を対象とした研究と、グループ場面や教室現場を対象にした研究があるためそれぞれを分けて検討する。さらには、接触場面における先行研究として日本語を母語としない日本語学習者の用いるスピーチレベルシフトの実態を調査した研究を取り上げる。最後に、これらの先行研究をまとめ、本研究との関連性を述べる。

1.1 母語場面におけるスピーチレベルシフト

1.1.1 母語話者同士の会話におけるスピーチレベルシフト

敬語研究は従来、社会的コンテクストにおいて論じられることが多かったが、その対象は文レベルまでに限られていた。敬語は話者・書き手と相手との社会的上下・親疎関係、その場の社会的状況と話題となっている事柄の性質によって決定されると考えられてきた。しかし、以上の3つの要素は敬語の原則的用法を決めるのに影響するが、現実の談話内に見られる敬語使用を説明することはできない。

スピーチレベルシフトについては最初に生田・井出(1983)が、敬語レベルが一定の談話と、敬語レベルの混用が見られる談話との2つに分け、談話内にみられる敬語レベルの変化の機能について論じた。この論文で用いられたデータはテレビ・インタビュー番組「徹子の部屋」からのものであり、スピーチレベルに関しては、敬語表現の使用を「+レベル」(尊敬・謙譲・丁寧語など)、不使用を「0レベル」として分類されている。談話内で敬語レベルのシフトが見られる場合、発話の敬語レベルを決定するものとして、次の3つの要因が挙げられている。それらは、社会的コンテクスト、話者の心的態度、話題の展開、である。社会的コンテクストは主体となる敬語レベルを決める。また、心的態度は、談話内で相手や話題となっている事柄に対する話者の心的態度の変化を表明するため、敬語レベルをシフトさせる。例えば、「+レベル」から「0レベル」へのシフトは、心的距離の短縮、つまり親しみや同調、支持の気持ちなど、相手に対する共感を表す。そして、社会的コンテクストは、一つの談話「ユニット」¹の移行の節目に一致し、それを明確に表示する機能を果たすとされている。

さらに、上記の3つの要因の「優先関係」が論じられており、社会的コンテクストは談話全体の主体となる敬語レベルを決定する機能をもっていると述べられている。また、社会的コンテクストによる制約がさほど強くない場合、話者の心的態度と談話の展開の要因

が機能する。中でも、会話をスムーズに進行させていくためのストラテジーとして用いられる話者の心的態度が、聞き手への配慮とも言えるため、談話ユニットの展開を明確に表示する機能に優先する、と論じられている。

生田・井出同様、Hashimoto (1992)も、テレビのトークショーからのデータを対象に、実際の会話における敬語表現の使用を「+レベル」、不使用を「-レベル」に分類し、分析を行った。58歳の女性インタビュアーによる、自身より年上の男女、年下の男女といった4パターンの会話で次のような結果を報告している。「+レベル」から「-レベル」へのシフトの割合の考察から、女性インタビュアーが異性と会話している時より、同性と会話している時の方が「-レベル」が多く、また、「-レベル」から「+レベル」へのシフトの割合から、異性が年上の時の方が、「+レベル」が多いという結果が得られた。このようなことから、社会的要因の中でも年齢の影響が性より強い、と指摘されている。

また Hashimoto (同上)では、この社会的要因以外にもスピーチレベルシフトに影響していると思われる要因として、次のようなものも挙げられている。それらは、敬語回避、感情の現れ、談話ユニット間の移行の現れ、である。敬語表現の回避は会話を円滑に進行させるためのストラテジーであり、談話ユニットの構造と心的距離の短縮とも関連している。また、スピーチレベルシフトの重要な機能の一つは、話者と相手との距離の調節である。「+レベル」から「-レベル」へのシフトは話者が相手に共感したり、同意したりしていることを示す場合もある。さらに、「+レベル」から「-レベル」へのシフトは同じ話題が続けられている時に行われ、「-レベル」から「+レベル」へのシフトは新しい話題を導入される時に使用される、とするものである。要するに、日本語の会話における敬語表現の使用と不使用は会話を円滑に進行させるための重要なストラテジーであり、敬意の表れというよりも、日本文化特有の「思いやり」と「心配り」の表れである、と Hashimoto は主張する。

一方、社会心理学的なアプローチで母語話者2者間のスピーチレベルシフトを研究したのが宇佐美(1995)である。母語話者の同一話者の同一会話内におけるスピーチレベルシフトに着目することによって、談話レベルから見た敬語使用のメカニズムの解明しようとしているものである。即ち、スピーチレベルシフトがいかなる条件のもとで生じるか、また、談話進行上スピーチレベルシフトがいかなる機能を持っているのかを明らかにしようと試みたのである。

スピーチレベルシフト生起の条件については、日本語の敬語選択の条件(南他 1974、南 1987)や Leech (1992)の3種類の context の概念を参考にローカル要因とグローバル要因の2側面から分析している。ローカル要因とは、言語的要因(発話の素材、内容等)、心理的要因(心的距離等)のような会話内の要因のことで、グローバル要因とは、対話者の年齢、社会的地位、性のような言語体系外の社会・文化的要因のことである。その中でも、この研究では、対話相手の年齢、社会的地位、性のグローバル要因に焦点が絞ら

れている。Brown and Levinson の politeness theory の枠組みを借り、同性と異性の被験者をそれぞれベースにし、「目上」、「同等」、「目下」の 6 通り（計 12 通り）の初対面の相手と約 30 分ずつ会話をさせている。話し合いのテーマは、「大学生活、海外生活」で、話題の展開、変更は自然にまかせ、データの妥当性を計るため、会話終了後、アンケートと口頭質問を行っている。スピーチレベルの分類としては、発話を尊敬語、謙譲語、美化語のような改まり度の高いものを「+レベル」、丁寧体を含む発話を「0レベル」、常体を含む発話や改まり度の低い発話等を「-レベル」の 3 種類に分類されている。

敬語使用から不使用へのシフトのローカル要因として、心理的距離の短縮、相手の「-レベル」に合わせるとき、独り言、自問する時、確認のための質問、或いは、答える時、中途終了型発話の時、の 5 つが挙げられており、敬語不使用から使用へのシフトの要因は次の 3 つとされている。それらは、「-レベル」から基本スピーチレベルに戻る時、新しい話題を導入する時、新しい話題を導入する質問に答える時、である。また、グローバルな観点から分析した結果は、次のようにまとめられている。は、同性同士の会話の場合、目下よりも目上の相手に対して、「0レベル」や「+レベル」から「-レベル」へのシフトの頻度が少ない。は、異性との会話において、相手の年齢・社会的地位にかかわらず、「-レベル」へのシフトが非常に少なく、「0レベル」や「+レベル」の発話が堅持される。特に女性は、「-レベル」の発話を控える傾向にある。さらに は、心的距離の短縮のためのシフトが少なく、中途終了型発話や確認のための質問や答え等の言語的文脈の影響による「-レベル」へのシフトの方が多い。心的距離の短縮のための「-レベル」へのシフトが最も多く使用されるのは、同性同等の相手との会話である、と述べられている。

以上、母語話者 2 者間の談話におけるスピーチレベルシフトの研究をまとめた。次に、2 人以上が関わっていると思われる教室談話やグループ討論場面における母語話者のスピーチレベルシフトを見ていく。

1.1.2 教室談話・グループ討論の場面におけるスピーチレベルシフト

グループ或いは、教室全体の談話を資料にスピーチレベルシフトを論じた研究には、教室における方言と共通語の使い分けとその機能を述べた茂呂（1997）、教室談話を分析した岡本（1997）、ボランティアグループのミーティングに焦点を当てた森下（1998）、大学生グループの討論場面を分析した杉山（2000）がある。

日本語の談話研究では言語形式に注目し、教室談話ジャンルという発話の型を形成していく過程を検討している茂呂の一連の研究が成果をあげている。特に、茂呂（同上）は、方言と共通語の使い分けをレジスターとしており、両方の使い分けが異なる役割をもっているとされている。例えば、教師に指名された生徒が起立して共通語で答えた後、着席後、隣の生徒に方言で答えるという場面の中で、前者が「公的」なものであり、後者が「非公

式」なものであるとされている。つまり、発話が誰に向けられたものであるかが、この 2 つのレジスターの区別で示されていることを明らかにしている。いわば、共通語は「教師及び教室全体に向けられた発話であり、公的なもの」を示すためのマーカーであり、一方、方言は、「隣の生徒にしか聞かせたくないもの、いわば、非公式なもの」である、と言える。茂呂は、教室がそれぞれのレジスターをどのように適切に配置し、関係付ければよいかを学ぶ場であると指摘している。厳密に言えば、教室とは、教師から生徒への知識伝達の場だけではなく、教師と生徒の相互行為の場であり、この相互行為を通して日本語のもつ多様な指標的機能を習得していく場である、ということになる。

茂呂同様、教室場面を対象に文体シフトの指標的機能を研究したのが岡本（同上）である。岡本は、メタメッセージとして文体の共存及び文体シフトを捉えており、教師と生徒によるメタメッセージの伝え合いを通して、教室という社会的場面が産出されていく過程を考察している。対象データは、小学校 3 年生の国語の授業での 1 時間分の録音・録画資料の文字化を元に談話分析を行っている。

結果として、文体シフトは授業が進められる過程の中で次の活動や次の質問に移行する位置で多く現れていることから、授業は一方的に教師に仕切られているということではなくて生徒と教師、双方の相互行為と言える、と岡本は指摘する。また、丁寧体と普通体の指標的機能と文体シフトの効果、及びそこから明確になる「教室の隠れたルール」が以下のように説明されている。1) 教室談話における教師と生徒の相互交渉から見た丁寧体と普通体の指標的機能により捉えられるメタメッセージには、熊取谷（1994）²が想定した言語使用状況特定化の下位項目に、「相手規定」と「自己規定」が付加されている。2) 文体シフトの効果として、丁寧体によって教師と生徒がメタコミュニケーションをはかり、授業が効率よく進む、教師は丁寧体により生徒の発話を制御し、普通体により発話を促している、教師と生徒が言語行動を普通体に変えることによって非公式に交渉する、教師が、公的権限によって処理する事柄がある場合、丁寧体を使うことがある、の 4 つが挙げられている。3) 教室の隠れたルールとは、教師の指示に対して、生徒は公的に否定しない、生徒は授業中、教師やクラスメートの発言に対して反論したり、評価したりする機械が与えられていない、生徒には発言権は与えられる、教師は授業中、生徒の要求を公的に否定することもある、のことである。要するに、教室という現場の中で、教師と生徒の相互行為における様々な要素は教師に対して、コントロール（決められた時間内で決められた項目を教えなければならないという制約）と開放（生徒の発話を引き出さなければならないという期待）といった相矛盾する言語行動が要求されている。文体シフトが、この矛盾を対処する 1 つの戦略として機能する、と論じられている。

教室場面と異なる性質を持つグループミーティングを研究対象にした森下（同上）は、ボランティアグループミーティングの参加者の談話における丁寧体（です・ます体の他に謙譲語・尊敬語を含む）と普通体（だ体）の 2 つの異なるスピーチレベルを発話のアドレス、

親しさの演出、参加者のフレームの観点から考察している。森下が扱ったボランティアグループミーティングには、行政機関がその場面を管理するミーティング（司会が行政担当者）と行政機関がかかわらないミーティング（司会もそのメンバーの者が行っている）の2種類あり、それぞれのミーティングの参加者の発話におけるスピーチレベルシフトを比較している。分析の結果、行政機関がかかわらないミーティングの参加者の発話には、アドレスが全体のもの、個人のものがあり、全体に向けられている発話はフレームが「公式」³のため、丁寧体を使用される。さらに、個人に向けられている発話には、フレームが公式なもの、「非公式」なものがあり、公式な発話には丁寧体を使用されるが、非公式な発話には普通体を使用されることがわかった、と報告している。一方、行政機関がその場面を管理するミーティングにおいては、司会者が行政担当者のため、ある程度のヒエラルキーが存在し、発話を影響していると思われる。結果として、ボランティア同士の会話がほとんどなく、発話アドレスによるスピーチレベルシフトも観察されなかった。司会者である行政担当者の発話は全体に向けられたものがほとんどで、丁寧度が高く、中途終了以外に普通体が現れなかった、と述べられている。

ミーティングと違う性質を持つグループ討論場面を取り扱った研究として杉山（同上）がある。この研究では、同じ大学の同じ学部にも所属する学生同士の討論場面での会話を取りあげ、スピーチレベルシフト生起の条件とその効果が論じられている。討論場面は通常、公的な場面のため基本レベルは丁寧体であるが、対象者が同学部の学生同士のため、基本レベルは普通体を中心に、尊敬語、謙譲語の出現はほとんど見られないことから、スピーチレベルを丁寧体（です・ます体の他尊敬語・謙譲語を含む）と普通体の2つのレベルで捉えている。

スピーチレベルシフトは1つの条件のみで起こるのではなく、いくつかの条件が同時に発話に影響する。スピーチレベルシフト生起の条件として、場面の变化、立場、役割の変化、談話管理、心理的な変化、発話を聞かせる相手の変化、談話構造の変化、の6つが述べられている。討論談話における基本の流れの部分（始まり、移行、終了）では、丁寧体が見られ、それ以外では、基本の普通体に戻る傾向がある。学生が司会者になった場合、丁寧体の使用が見られ、また、丁寧体や普通体のシフトにより談話管理を行っている、と杉山は指摘している。

以上、教室談話・グループ討論の場面におけるスピーチレベルシフトの先行研究をまとめた。次に、接触場面における中・上級日本語学習者のスピーチレベルシフトの先行研究について述べる。

1.2 接触場面におけるスピーチレベルシフト

母語場面におけるスピーチレベルシフトについては、上に述べたように、数多くの研究

があるが、中・上級非母語話者が用いるスピーチレベル及びそのシフトについての研究は上仲（1997）、佐藤（2000）ぐらいしかない。

上仲（同上）では、学習者の談話をスピーチレベル及びそのシフトの観点から数量的に分析されており、母語話者のそれと比較している。さらに、母語話者について、スピーチレベルの選択やそのシフトに影響を及ぼすとされている要因が学習者にも当てはまるのかを検証している。

コントロールされた状況で実験を行うため、あらゆる条件を統一した。ベースとなる被験者は日本滞在中の中・上級日本語学習者4名で、全員英語母語話者である。会話相手の母語話者を「目上」、「同等」、「目下」の3つのカテゴリに分け、すべて同性、初対面の会話に制限して、年齢とスピーチレベルシフトの関係を検証しようとしている。実験前には会話相手となる人の名前、年齢、職業などの情報は何も与えられていない。各会話は約20分程度で、話す内容は自由である。スピーチレベルの分類については、三牧（1996）に従って、文体レベルと語レベルに分けて分析している。

ここでは、学習者のスピーチレベル及びそのシフトが、社会的要因、話者の心的態度、談話の展開、の3つの観点から分析されている。学習者は、対話相手の目上、同等、目下という社会的要因によって選択するスピーチレベルを明確に使い分け、それを話すスタイルに反映させている、と上仲は指摘する。文体の優先スピーチレベルを「+レベル」と「0レベル」のうち、より多く用いられたものに決定し、分析の結果、母語話者がその場の雰囲気や状況に合わせて柔軟に切り替えを行っているのに比べて、学習者は、年齢の社会的状況により大きく拘束されていることを指摘している。

話者の心的態度はミクロとマクロの心的距離の短縮から観察しており、ミクロの心的距離の短縮とは、一時的に「0レベル」にシフトして再び元の「+レベル」に戻るという特徴があり、一方マクロの心的距離の短縮とは、会話が進むにつれて待遇度が少しずつ減り、「0レベル」の割合が増えるといった現象として捉えている。学習者の同一談話内においても、両方のミクロとマクロの心的距離の短縮の現象が観察されたことを明らかにしている。

スピーチレベルシフトは談話の構造的変化にも関係があることから、談話の展開の観点を「話題の変換部分」、「確認のための繰り返し部分」、「補足、独話の挿入部分」の3つの下位分類として分析している。話題の変換の標識としてのレベルシフトの場合、Z検定を行った結果、母語話者と学習者は同じようにシフトしていることが判明し、確認のための繰り返しでは、文体レベルで「0レベル」が最も多く選択され、「負」のスピーチレベルシフトが起こる傾向があるという結果を述べている。これは母語話者と学習者に共通した現象であったが、母語話者が目上に対して負のシフトを行うのは9%であるのに比べて、学習者のそれは35%だったことから学習者は目上に対して負のシフトを行いすぎると失礼に当たる可能性が生じることに注意が必要である、と上仲は指摘する。補足、独話の挿入の部分では、母語話者と外国人共に、対話相手に関係なく、「0レベル」が多く選択され、Z検定

の結果母語話者と学習者の間に有意な比率の差は認められなかったことを明らかにしている。

結果として、学習者と母語話者のスピーチレベルの選択及びそのシフトには、類似点が多く、すでにスピーチレベルの原則は無意識のうちに習得されている。しかし、より詳細な観察を続けていくと、確認の繰り返しの部分で目上の発話に対して負のシフトを行いつぎることや語レベルで「+レベル」にすることで文体の「0レベル」をカバーしたりするような相違点が述べられている。学習者にまだ完全に習得されていないものを教師が把握し、教えてあげることが日本人の生の会話スタイルに近づけるための近道である、と上仲は指摘する。

母語話者と学習者のスピーチレベルシフトを比較した結果類似点が多く、無意識のうちに学習者はスピーチレベルシフトの原則を習得していると論じた上仲に対して、学習者のスピーチレベルシフトの様態及びその要因は母語話者と大きく異なることを強調したのが佐藤（同上）である。佐藤は、母語話者と学習者の談話資料の比較を通じてスピーチレベルの選択やレベルシフトの要因についての両者の相違点を解明することを目的としている。他の研究と違って、ここでは、話者の待遇意識の方向からスピーチレベルについて考えるのではなく、発話の言語形式においてどのようなスピーチレベルが示されているかという現象に注目し、考察を行っている。即ち、話者の意志のはたらきの有無はともかく、結果としてどのようなスピーチレベルが示され、またレベルシフトが生じているかということに焦点を当てている。

調査対象者としては、東北大学に在籍する中・上級日本語学習者 24 名と、同大学に在籍中の日本語母語話者 12 名であるが、これらを組み合わせて学習者と母語話者のペアを 12 組と、母語話者同士のペアを 12 組作った。ペアはいずれも初対面同士によって構成され、挨拶、親子関係、夫婦別姓がテーマのテレビ番組の録音ビデオを見せた上で会話を最大 15 分間させた。そして、スピーチレベルを、発話末にある種の助詞が付くかどうかに着目し、

「ね、よ」が付かない丁寧体、「ね、よ」が付く丁寧体、「ね、よ」が付かない非丁寧体、「ね、よ」が付く非丁寧体、の 4 段階に分けている。基本スピーチレベルを決めるため、すべての発話を丁寧体と非丁寧体に大別し、発話数の中で多い方を基本スピーチレベルとしている。

母語話者のレベルシフトの要因として、定型的省略、反復回避、中途終了、中断、呼応答、確認、独話、の 7 つが挙げられている。学習者も同様の要因の影響を受けてレベルシフトをしているが、彼らの用いたスピーチレベルシフトの要因の中で、適語探索の場合、のような母語話者の会話に用例がないような要因もあった。これ以外にも、 から までの要因によらない例が数多く認められ、47・33%の発話の場合、シフトの要因が特定できなかった。結果として、学習者の会話に見られるスピーチレベルやレベルシフトの様態、その要因はさまざまな点で母語話者の場合と大きく異なっていると言える、

と述べられている。不自然なスピーチレベルの選択とそのシフトを克服するための対策として、終助詞の付いた丁寧体に習熟させること、終助詞の付いた非丁寧体形式は改まった会話では不適切であるため、使わないよう指導すること、母語話者のレベルシフトの要因として効率を占めている定型的省略、中途終了、独話をとりあげ、これらの要因によるレベルシフトで典型的に見られる発話未形式を重点的に指導する必要性が強調されている。

以上、母語場面と接触場面におけるスピーチレベルシフトに関する研究をまとめてきた。次に、本研究との関連性を述べる。本研究は接触場面が研究対象であることから、接触場面の研究との関連性を中心に見ていく。

1.3 まとめと本研究との関連性

最初に敬語レベルの変化の機能について論じた生田・井出(1983)から、接触場面における学習者のスピーチレベルシフトを研究した佐藤(2000)まで、レベルシフトの研究は数々の成果を上げてきたと言える。特に、母語場面においては、2者間の談話だけではなく、教室内談話やグループ討論場面のような2人以上の談話も研究対象とされており、母語話者のスピーチレベルシフトがより多面的なアプローチで研究され、成果が出されている。スピーチレベルシフトの研究の土台とも言える生田・井出をきっかけに、Hashimoto(1992)や宇佐美(1995)は、2者間のスピーチレベルシフトの要因を詳しく述べている。また、日本語教室談話研究では、茂呂(1997)が言語形式に着目し、発話が誰に向けられているのかが、方言と共通語の2つの異なるレジスターの区別で示されていることを明らかにしている。そこで、岡本(1997)は、教室談話におけるスピーチレベルシフトがどのような言語使用状況を特定するメタメッセージを伝えているのかに焦点を当て、丁寧体と普通体の指標的機能とスピーチレベルシフトの効果を詳しく述べている。言い換えれば、スピーチレベルシフトの要因だけではなく、スピーチレベルシフトの指標的機能が母語話者同士の相互行為にどう影響しているのかを明らかにした研究と言える。さらに、森下(1997)、杉山(2000)はミーティングやグループ討論場面を公的や非公式という場面のフレームで説明しており、発話アドレス、フレームとスピーチレベルシフトの関わりを見ている。しかしながら、こういった2者間以上のグループにおける母語話者同士のスピーチレベルシフトに関する研究はまだ少なく、一般化するにはさらに多くの研究を重ねる必要がある。

一方、母語場面におけるスピーチレベルシフトに関する研究に比べて、接触場面におけるスピーチレベルシフトの研究は上仲(1997)と佐藤(2000)のみに限られている。ネウストプニー(1982)、窪田(1990)は、日本語を母語としない学習者や非母語話者にとっては、状況に応じたスピーチレベルの使い分けこそが、最も習得の難しい点になっている、と指摘している。この背景には、非母語話者へのスピーチレベルシフトの原則の指導に問題が

ある、と言える。と同時に、接触場面における非母語話者のスピーチレベルシフトについての研究の少なさも関連していると思われる。詳しく述べると、母語話者との相互行為における非母語話者のスピーチレベルシフトはどのようなものなのか、また、母語話者と異なる要因でシフトをしているとしたらその原因は何なのかを明らかにする必要がある。つまり、母語話者のスピーチレベルシフトの実態を研究し、その結果を非母語話者に教え込むだけでは問題の解決にならないと思われる。今もっとも必要とされるのは、母語話者との相互行為における非母語話者が用いるスピーチレベル及びそのシフトに焦点を当てた研究である。このような研究こそが非母語話者のスピーチレベルシフトの実態を明らかにでき、ネウストプニーと窪田が指摘するようなスピーチレベルの使い分けの問題の解決の一助になるだろう。

その第一歩とも言えるものとして、上仲（1997）、佐藤（2000）があるが、まだ多くの問題が解決されないままである。上仲（同上）は、日本語学習者を研究の対象にしている点においては意義があると考えられるが、分析結果は研究対象となった学習者が4名という特殊性から出ているものと思われ、一般化し難いものである。さらに、社会的要因として年齢を取り上げ、初対面の会話で非母語話者をベースに目上、同等、目下の母語話者を相手にスピーチレベルを観察しており、結果として、非母語話者はスピーチレベルを明確に使い分けていると述べている（詳しくは1.2を参照）。しかし、会話相手となる母語話者の情報を何も知らせていない非母語話者のスピーチレベルの使い分けから、母語話者の年齢を意識して、スピーチレベルがそのような結果になったとは言えないのではないだろうか。要するに、年齢を社会的要因として扱ってはいるが、学習者は年齢をどのように捉えているのかは、基本スピーチレベルの選択だけでは明確ではない。年齢以外の要因が影響していることも考えられるのではないだろうか。

一方、佐藤（同上）は、中・上級日本語学習者の発話末形式からスピーチレベルシフトの様態を検討し、さらに母語話者と非母語話者のレベルシフトの要因の比較考察を行っている（詳しくは1.2を参照）。非母語話者がどのような要因の影響を受けてスピーチレベルシフトを行っているのかについて詳しく述べられているため意義があると思われる。しかしながら、ここでは言語形式にしか注目していないことに問題があると思われる。言い換えれば、結果にだけ注目し、学習者の発することばのプロセスには注目していないのである。そして、この研究では、ある程度改まった丁寧体ベースの会話例を対象として学習者と母語話者の話し方の違いを解明しようとしているため、基本レベルが非丁寧体であった4名の学習者のスピーチレベル及びそのシフトを対象外としている。基本レベルが丁寧体でない学習者の発話はなぜそうなっているのか、その要因の解明こそが重要であり、それを対象外にするのでは問題の解決にはならないと思われる。

これまで述べてきた接触場面における学習者のスピーチレベルシフトについての上仲や佐藤の研究には共通する2つの問題点が浮かび上がってくる。一つは、これらの研究が、

想定された結果を得ることを目的として行われたものであるように見受けられることである。そのため、研究条件を統一したり、問題発話を研究対象外にしたりしているため、結果として、非母語話者が話すことばの言語形式にだけ注目することになり、なぜ母語話者と異なる形式が観察されるかは解明されないままである。母語話者とは異なる非母語話者のスピーチレベルの選択及びシフトの実態を解明するには、ことばのプロセス、いわば、「どのように」に注目する必要があると思われる。Mehan(1978)によると、教育社会学の研究には社会構造を拘束的で客観的な「社会的事実」であるかのように扱っているものが多いという。このような研究は一般に、社会構造の中の統計的な関係を探求していても、社会的な事実がどのように生み出されるかを考察するまでには至っていない。上述した先行研究はこれと同じことが言えるのではないだろうか。これからの研究では、結果にではなく、ことばのプロセスに焦点を当てた研究が必要となってくる。

もう 1 つは、研究対象となったデータに関する問題点である。両者の研究データは、自然なデータとは言いながらも、非常にコントロールされた条件の中での発話データと言える。社会的事実を述べるとなると、自然な発話データが必要不可欠である。阿部(1998)は、談話研究における自然データの重要性について、こう述べている。「談話研究において、現実には人々が社会生活を営んでいる場面から採取した自然発話データが必要なのは、自然発話データには、氷山のごとく、水面下にその言葉特有の社会性、文化性などが隠されており、水面上の氷を手がかりに、水面下に潜むものを明らかにできるからである」。したがって、実際の社会生活にありえるような相互行為を研究対象にしない限り、真のスピーチレベルシフトの研究は不能と言える。

そこで、本研究ではスピーチレベルシフトを切り口に、接触場面の先行研究に足りないと思われるもの(下線の部分を参照)を少しずつ取り入れながら母語話者と非母語話者の相互行為における社会的な事実を述べていくことを目指す。データとしては、グループ討論場面における自然な発話データを対象に、非母語話者のスピーチレベル及びそのシフトに着目し、その機能を分析する。

¹ 生田・井出(1983)では、話者の頭の中には、談話の下位区分としてまず、文法的な文の概念よりもむしろ、内容的統一の取れた一まとまりのいわば、「小話題」がいくつかあって、その組み合わせによって談話が構成されていると考えられる。このような下位区分を談話のユニットと呼んでいる。

² 熊取谷(1994)は、メタメッセージの主なものに発話がどのような調子でなされたかによって伝達される「言語使用状況特定化のメタメッセージ」があるとし、その下位項目として「状況規定」と「対人関係規定」の2つをあげている。

³ 茂呂が教師および教室全体に向けられた発話を「公的」なもの、隣の生徒にしか聞かせたくないものを「非公式なもの」と分けているのに対して森下は「公式」と「非公式」を対立概念として扱っている。

第2章 研究課題と研究方法

第2章では研究課題を述べた上、研究の方法と対象現場を説明する。本研究は、エスノメソドロジ-的談話研究の1つであることから、まずは、談話研究における社会言語学的なアプローチを説明し、本研究におけるエスノメソドロジ-的アプローチの必要性を述べる。最後に、対象現場とデータ収集について説明する。

2.1 研究課題

本研究の目的は、グループ討論場面において上級非母語話者¹がどんなスピーチレベルを選択し、どのようにシフトして会話を進行させていくのかを明らかにすることである。したがって、以下の2つの課題を設定した。

課題1: 上級非母語話者の全体活動フレームにおけるスピーチレベル及びそのシフトはどんなものなのか。また、そのスピーチレベルシフトが談話進行上、いかなる機能を持っているのか。

課題2: 母語話者とは異なる要因でシフトしているのか。しているとしたら、それはどんなものなのか。また、その機能は何なのか。

2.2 研究方法

本研究では、非母語話者のスピーチレベルシフトを社会言語学的なアプローチで検証していく。そのため、社会言語学における談話研究の流れを説明する必要があると思われる。社会言語学における談話研究をまとめながら本研究の方法論的な位置付けにつなげていく。

2.2.1 談話研究における社会言語学的なアプローチ

ひとまとまりの現実のことばである談話の研究には、多様なアプローチがある。その中で、特に社会言語学にかかわるとされる研究のいくつかを紹介する。現実の話しことばを出発点にしなければならない社会言語学においては、Labov, W. (ラボフ)が日常使われる自然談話を資料とし、談話分析を通じて発話と発話のつながり方のルール、或いは語りの構造などを説明している。Halliday (ハリディ)は談話を意味の単位として捉え、それをtext (テキスト)と呼び、言語研究の対象としている。Hallidayに影響された談話研究は数多くあるが、中でも、Sinclair, J. and Coulthard, R. (シンクレア、クールトハード)の教室での生徒と教師の談話研究がよく知られている。日本語の会話構造を敬語などの言語形態と社会的コンテキスト、それに、ノンバーバルな面も加えて分析しているのは

Hinds, J. (ハインズ)である。

ことばを使うことにまつわる様々な要素をトータルに捉え、ことばを使う能力、つまり communicative competence(伝達能力)の解明の必要性を唱えたのは、言葉遣いの民俗誌という分野を確立した言語人類学者の Hymes, D.(ハイムズ)である。彼は、speech event を研究の基礎単位として設定し、会話の参加者、状況、話題などをトータルに研究対象とすることで、伝達能力の解明ができると考える。

さらに、Garfinkel, H. (ガーファンクル)が 1960 年代に提唱した ethnomethodology(エスノメソドロロジー)は、社会学の新しい方法論的アプローチであり、社会学と人間科学という領域において新しいパラダイムを構成している。エスノメソドロロジーの最も発達した豊かな領域の一つは、conversation analysis(会話分析)である。中でも、Schegloff, E. (シェーグロフ)や Sacks, H. (サックス)の会話分析は談話研究にも大きな影響を与えてきた。

エスノメソドロロジーの研究は、Schutz, A.(アルフレッド・シュッツ)が言ったように、私たちがみな「実践的社会学者」であるという考えを中心にして成り立っている。換言すれば、エスノメソドロロジーは、人間が日常生活で使っている方法についての研究である。その方法を使うことで、人間同士の共存が可能になり、対立関係であれ、平和な関係であれ、自分たちの社会関係を管理することが出来るのである。そして、人間の日常生活におけることばと行動には、説明可能なルールがあり、それらの普遍的なルールをトータルで捉え、エスノメソドロロジーの方法論で説明することができるとしている。説明可能なルールとは、例えば、会話を続けるためには、会話は組織化される。即ち、会話はある秩序を守っている。ことばを使うやりとりの過程で、この秩序を説明する必要はないが、それを理解するためには必要不可欠である、のようなことを指している。

以上述べた研究が、実際に使われたことばを対象とし、ことば使用のメカニズムを社会的な文脈から追求することを目的としている。しかし、実際はどの研究においても研究系統の混用が見られる。実際に使われたことばを対象にする時、そこにある様々で複雑な要因を考慮しなければならない。それらの要因の解明には学際的なアプローチが必要であり、その解明こそが社会言語学の課題でも言えよう。

2.2.2 本研究の方法論的な位置付け

エスノメソドロロジーの方向性にいち早く興味を示した研究の中には、Moerman, M.(1968) (モアマン)、Bellman, B. (1975、1984) (ベルマン)、Bittner, E. (1974) (ビットナー)などがある。中でも、Mehan, H. (メハン)の教育社会学におけるエスノメソドロロジーが有名である。Mehan (1978) はエスノメソドロロジーに示唆を受けた新しいアプローチを提案した。それは、「構成的エスノグラフィー」と呼ばれる。構成的エスノグラフィーの研究は社会構造が社会的達成であるという相互行為的な前提に基づいて行われる、とされている。これはエスノメソドロロジーの根本原則の一つであると言える。つまり、「社会的事実、実

践的な達成である」というものである。Mehan(同上)によると、教育社会学の研究には社会構造を拘束的で客観的な「社会的事実」であるかのように扱っているものが多い。このような研究は一般に、社会構造の中の統計的な関係を探求していても、社会的な事実がどのように生み出されるかを考察するまでには至っていない。そこでは、1つの過程として、教育の現場が「ブラックボックス」として扱われてきたとされている。このブラックボックスの分析は、そこへの入り口とそこからの出口だけに興味を持ってきた研究者によって無視されてきた。その入り口で、研究者は、性別、親の社会的地位などのような変数をいくつか「入力」する。そして、出口で、例えば、落第者や退学者のパターンを記述し「社会的地位が低い父親を持つ子供は父親と同じような仕事をするようになる」と結論したり、不平等が再生産される、と指摘したりする。しかし、不平等は「どのように」再生産されるのか、その過程については、そこでは記述しないのである。「どのように」とは、いわば、教育現場における関係者同士の教育的相互行為を意味する。その教育的相互行為こそが、研究者が説明しようとする結論において重要な役割を持っているはずであるにもかかわらず、教育社会学者は、教育過程を直接検討しない、と Mehan は指摘する。

この Mehan による指摘のように、母語話者と非母語話者の相互行為についても同じことが言えるのではないだろうか。教室現場においてはもちろんのこと、教室とは多少異なる性質を持つ、本研究の対象となったような現場においても同様のことが言える。それは、相互行為が生み出すことばのプロセス、つまり、「どのように」こそが重要であり、注目の対象にしなければならない。1.3 の「まとめと本研究との関連性」にも述べたように、接触場面における母語話者や非母語話者の発話を対象とする研究の多くが、ある結果を求めて実験のために接触場面を作り、発話データ収集のためにテーマを与える。被験者となった母語話者と非母語話者がそのテーマについて定められた時間内に話し合いをする。研究者がその発話データを元に、分析し結論付ける。このような研究は、明確な結果は出せるが、本来の問題、つまりなぜ非母語話者は上級にもかかわらず母語話者と異なるスピーチレベルシフトを使用するのか、の解決にはならない。こうしたアプローチになつては、母語話者と非母語話者の相互行為が生み出すことばの「プロセス」、或いは、「どのように」はそもそも説明不可能ではなからうか。

そこで、本研究では、参加者が自ら問題意識を持って作り上げた現場における相互行為が生み出したことばのプロセスを、スピーチレベルシフトの観点からエスノメソドロジック的談話分析の方法論で説明を試みる。このような現実に使われていることばのプロセスを追求するのが社会言語学の一つの課題である。しかし、科学的な概念装置ではなく、相互行為の参加者がお互いを理解し合う方法論、いわゆるエスノメソドロジックの方法論を用いて、説明することの重要性を再び強調したい。

2.3 対象現場及びデータ収集

2.3.1 対象現場

お茶の女子大学大学院人間文化研究科日本語教育コースにおける大人を対象とした Language Acquisition Research Project(略して、大人 LARP)が本研究の対象現場となった。大人 LARP は、2000 年 7 月に、本大学院人間文化日本語教育コースで実施された 8 日間の日本語教育実習「言語と文化の交流クラス」(岡崎他(2001)参照)を出発点として始まったものである。2000 年 7 月の実習を終え、2000 年 12 月から大人 LARP として再出発した。以降、2001 年 3 月まで一回 2 時間、隔週の割合で行った。2001 年 4 月から 5 月までの一時的な中断をはさみ、2001 年 6 月から再びスタートし、現在まで続いている。本研究では、このうち 2000 年 12 月から 2001 年 9 月までをデータ収集期間とした。

2.3.2 対象現場の特徴

2000 年 7 月の実習での参加者の言動から、日本人・外国人を問わず、地域社会で生きていくことにおいて様々な問題を抱え、そうした問題を共有する場を必要としていることが浮かび上がってきた。そこで、日本人=教える人、外国人=教えられる人という従来の構図を超えて、出身や年齢など様々な文化背景を持った人が集まって、共に学び合いながら、地域社会で自分を表現し行動できる力を作る足がかりになるような場を設定することとした。この場では、ブラジルの成人識字教育者 Paulo Freire のアプローチである「Problem-posing(問題提起学習)」²を参考に、個人が問題に感じていることや、他の参加者に話したいことなどの「トピック」を持ち寄り、お互いに意見を交換しながら学んでいくことを目指す「話題提起」の方法を取った。また、一個人として一過性でない「継続的な対話」を重ね、その対話の積み重ねからそれぞれにとって実感のある多文化間交流を行おうという目的から、一回 2 時間、隔週の割合で行ってきた。

各回の活動は主にグループ討論の形で進められたが、形式的な違いや内容的な違いに基づき、2つの形態を原則としてとった。まずは、全体活動として話題提起者が、問題に感じていること等を全体に向けて詳しく語る。そして、さらに参加者全員が積極的に参加できるよう、全体活動だけではなく、より少人数の小グループ活動も取り入れた。全体活動では、話題提起者が存在し、参加者全員に向けて話題提起をすることが主だった。一方、小グループ活動の目的は、参加者が少人数でより積極的に、全体活動で話題として取り上げられたことについて各自が意見を述べることやお互いの意見交換が主だった。しかしながら、毎回同じ形ではなく、トピックによって小グループ活動を行わない場合もあり、特に、2001 年 6 月からは、参加者の 2 人(男性 1 名と女性 1 名)が退会し、メンバーの欠席者も多いことから、全体活動から特に分けて小グループ活動を行うことはなくなった。

2.3.3 対象者

2000年7月の実習に参加し、引き続き2000年12月から大人LARPに参加した母語話者10名(2名が12月からの新メンバー)と日本語上級非母語話者5名³(1名が12月からの新メンバー)計15名である。表1は参加者のエスノグラフィックプロフィールである。

【表1】参加者のエスノグラフィックプロフィール

性	年齢	職業	出身	滞日年数
女性	40代	主婦	イラン	10
女性	40代	主婦・パートタイム	韓国	6
女性	40代	主婦	中国	14
女性	40代	自営業	中国	15
女性	30代	主婦	フィリピン	6
女性	40代	主婦・パートタイム	日本	
女性	40代	主婦	日本	
女性	40代	学生	日本	
女性	20代	学生	日本	
女性	20代	学生	日本	
女性	20代	学生	日本	
女性	20代	学生	日本	
女性	50代	主婦・パートタイム	日本	
女性	70代	主婦	日本	
男性	60代	定年退職	日本	

2.3.4 各回の情報

本活動の日程、トピック、活動内容、データの種類の情報は、以下の通りである。

【表2】各回の情報

日程	トピック ⁴	活動形態	データの種類
2000年12月5日	日本に来て驚いたこと (交通ルール)	全体活動・グループ活動	録音、フィールドノート、 メモ

12月19日	主人という言葉	全体活動	録音、フィールドノート、メモ
2001年 1月9日	言葉が通じないということ	全体活動・グループ活動	録音、フィールドノート
1月23日	テレビの与える影響	全体活動・グループ活動	録音、フィールドノート
2月6日	風習・習慣に従う必要があるのか	全体活動・グループ活動	録音、フィールドノート、メモ
2月27日	日本語でうまく表現できないとき	全体活動・グループ活動	録音、フィールドノート
3月13日	ボランティア経験	全体活動	録音、フィールドノート
3月27日	子供の教育	全体活動	録音、フィールドノート
6月5日	テーマなし	全体活動	録音、フィールドノート、メモ
6月21日	テーマなし	全体活動	録音、フィールドノート
7月5日	ハンセン病と差別	全体活動	録音、フィールドノート、メモ
7月19日	お金の貸し借り	全体活動	録音、フィールドノート、録画
8月30日	自分の経験を語る	全体活動	録音、フィールドノート、録画
9月13日	年の取り方	全体活動	録音、フィールドノート、録画
9月27日	我が家の知恵袋	全体活動	録音、フィールドノート

2.3.5 データの種類

研究の基になっているデータは、観察、メモ、フィールドノート、インタビュー、録音、録画によって集められた。フィールドノートには各回の状況及び参加者の発言などを細かく記述した。2001年4月に一回、インタビュー⁵項目を立て、参加者全員にインタビューし、その内容を録音した。途中で3回活動内容を録画した。今回は、フィールドノート、インタビュー、録音をデータとして分析を行う。

2.3.6 文字化記号の説明

録音された会話をできる限り発音に忠実に文字化をしたが、文字化記号の説明は以下の通りである。

数字付きのアルファベット：話者

F: 非母語話者

J: 母語話者

F1～F6: 非母語話者

J1～J10: 母語話者

F#: 特定できない非母語話者

J#: 特定できない母語話者

……: ポーズ

{ } : 笑い

? : アクセント上昇

@ : 聞き取り不能

() : 省略

¹ OPI 評価で上級とされている。

² Problem-posing とは、教育は人の生活の問題から出発することを前提とし、対話を通して、学習者の生活に対する批判的な見方を伸ばす 自尊心を高めるための行動方法を開発する 生活を改善するための方法である。

Problem-posing を日本語教育に取り入れた例として、岡崎（1993、1996）、池田（1996）、野元（2000）などがある。

³ 筆者も参加者の一人だが、研究の対象としない。

⁴ トピックの命名は話題提起者によるものである。

⁵ このインタビューは、予め質問項目を準備した上で、自由に感想などを述べてもらう、いわば、半構造なるものである。

第3章 分析結果と考察

本章では、第3章で述べた2つの研究課題についての分析結果と考察を述べる。そのためにもまず、データの分析方法を述べる。分析方法では、スピーチレベルシフトに深く関連していると思われるフレームの概念と、母語話者と非母語話者の相互行為の記述に必要な knowledge schema の概念を説明する。また、生田・井出(1983)のスピーチレベルシフト生起の3つの「要因の優先関係」という枠組みと、frame/knowledge schema の概念が上級非母語話者のスピーチレベルシフト生起にどのように関連しているのかを分析の観点として述べる。最後に、全体活動フレームにおける on stage frame と off stage frame の発話事例を挙げながら分析結果を記述し、考察を述べる。

3.1 分析方法

3.1.1 分析の枠組み

生田・井出(1983)は、敬語使用から談話を大別すると、敬語レベルが一定であり、「+レベル」が使用される談話(演説、面接試験等)と、敬語レベルが混用されている、つまり、「+レベル」と「-レベル」の両方が使用される談話(日常会話、対談、雑談等)の二つがある、と指摘する。ことばを変えれば、演説、面接試験等のような公的場面では「+レベル」(尊敬、謙譲、丁寧語等)のスピーチレベルが使用され、対談、日常会話のような非公式場面ではスピーチレベルのシフトが見られ、「+レベル」と「-レベル」が混用されやすいことを意味する。即ち、スピーチレベルシフトは、発話の address(アドレス)(Bakhtin, 1979)つまり、発話が誰に向けられているのかと、frame(フレーム)(Bateson, 1954, Goffman, 1974)つまり、公的場面と非公式場面という枠組みと関係していると言える。

そこでまずは、本研究とも深く関連するフレームの概念を詳しく述べておきたい。Bateson, G. (ベイトソン)が1955年に初めてフレームの概念を“A Theory of Play and Fantasy”(1954, 1972)で用いて以来、言語人類学者並びに社会学者の研究にこの概念が反映されてきた。中でも、フレームを“means of speaking”として扱った Hymes は、次のように述べている。

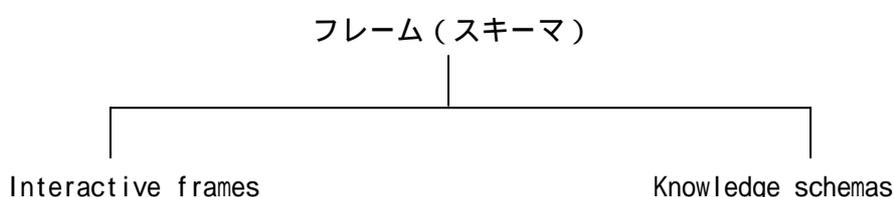
“ In order to interpret utterances in accordance with the way in which they were intended, a hearer must know what frame s/he is operating in, that is, whether the activity being engaged is joking, chatting, lecturing or performing a play, to name just a few possibilities familiar to our culture. ” (Tannen, D. (1993), pg.18)

フレームを徹底的に研究した社会学者の Goffman, E. (ゴッフマン)は『Frame Analysis』

(1974)では、フレームを対象の認知・意味づけ・対象との関わりを規定する機能を持つ解釈図式であり、人々が現実を経験するために採用するもの、と説明している。要するに、フレームは、相互作用における言語使用を明らかにする鍵であると言えよう。Tannen、D.(タネン)(1993)は、フレームとスキーマの両方を用いて相互行為を説明している。さらに、スキーマの意味を包括しているフレームを、interactive frames(主に、人類学者 Frake(1977)、言語人類学者 Hymes(1974)、や社会学者 Goffman(1974)の研究で代表されるフレームの意味)と、knowledge schemas(主に、人工知能の Minsky(1975)、や言語学意味論の Chafe(1977)、Fillmore(1975、1976)の研究で用いられるフレームの意味)の2つに分けている。Tannen(1993)は interactive frames と knowledge schemas を以下のように説明している。

The interactive notion of frame refers to a definition of what is going on in interaction, without which no utterance (or movement, or gesture) could be interpreted. It refers to a sense of what activity is being engaged in, how speakers mean what they say. Whereas, knowledge schema is used to refer to participants expectations about people, objects, events and settings in the world. As Hiedegger, M.(1962) said, the word "hammer" can have no meaning for someone who has never seen a hammer used. (Tannen, D. (1993), pg.59-60)

Tannen が用いるフレームとスキーマに意味は、以下の図表で示すことができる。



人が同じ frame と knowledge schema の中で行動している限り、コミュニケーションブレイクダウンは起こらないだろう。しかし、Hiedegger がいうように、金槌を見たことのない人にとっては、金槌という言葉は何の意味も持たない。社会医学者 Kleinman (1980) や人類医学者 Mishler (1984) は、医者と患者の異なる knowledge schema が両者の相互行為に与える影響を研究している。Tannen はこの異なる knowledge schema を divergent knowledge schema と名づけている。厳密にいえば、医者が病気について持っている情報は、患者が持っているものと大きく異なる。両者は divergent knowledge schema を持っており、結果として、それが両者の相互行為に影響を与え、誤解の原因ともなっている。では、母語話者と非母語話者の相互行為の場合はどうだろうか。母語話者は母語(L1)としての日本語でコミュニケーションをしており、当然ながら非母語話者の持つ日本語運用能力とは異なる。これは、医者と患者の情報量の違いにも例えられる。したがって、両者の相互行為に

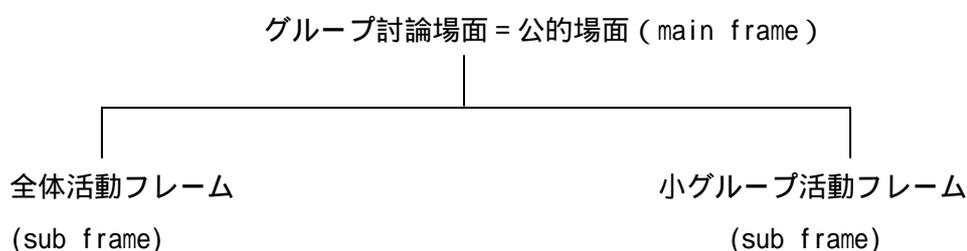
においても divergent knowledge schema が存在すると考えられ、それが相互行為に影響を与えていると言える。

今までは、frame と knowledge schema の概念は、母語 (L1) と第 2 言語 (L2) や外国語の divergent knowledge schema を持った者同士の相互行為において大変重要であることを強調してきた。次は、この枠組みの中で、本研究の観点について述べる。

3.1.2 分析の観点

2.3.2 の「対象現場の特徴」にも述べたように本研究の対象現場は、母語話者と上級非母語話者が問題提起をし、その問題について相互に意見を出し合って共に解決方法を探るという場である。いわば、公的なグループ討論場面であると言えよう。このグループ討論場면을観察すると、それは組織化されているように見える。参加者は適切な時に順番に発話しており、彼らが選ぶスピーチレベルやそのシフトも、全員に向けての発話の時と、より少人数による会話等の時とは異なる。要するに、そこには実際の社会組織が存在すると言える。もちろん、それはグループ討論という制度化された秩序である。では、この制度化された秩序と先ほど述べたフレームはどのように関連しているのだろうか。

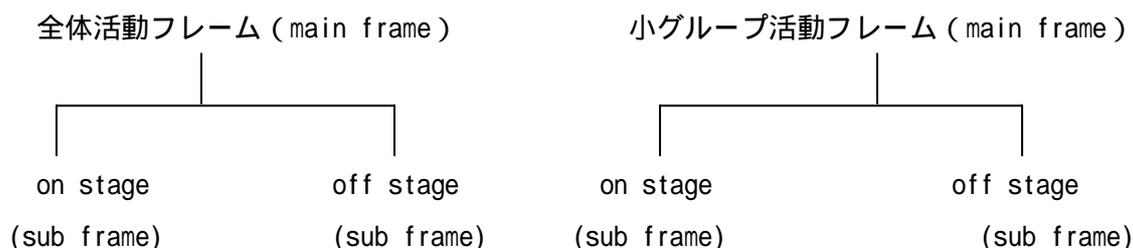
本研究で扱うグループ討論場面には公的場面という main frame (メインフレーム) が存在している。このメインフレームは活動の形態的な違いから、全体活動フレームと小グループ活動フレームの sub-frame (サブ・フレーム) に、以下のように分けられる。



全体活動フレームの特徴として、話題提起者が存在すること、話題提起者が全員に向けて話題提起を行い、参加者全員 (聞き手) が一斉に活動に参加すること、話題提起者に対して聞き手が個人的な質問やコメント等をする場合がある、の 3 つが挙げられる。一旦全体活動フレームに入ると、参加者の焦点がグループ討論場面フレームより全体活動フレームにシフトする。つまり、上述した 3 つの特徴が参加者の言語行動に影響をするようになり、全体活動フレームが main frame の役割を担うようになる。さらに細かく見ていくと、全体活動フレームの main frame には、話題提起者が全員に向けて話題や問題を提示する時の on stage frame (オン・ステージフレーム) だけでなく、全員に聞かせることを目的としない個人的な質問や受け答え等を含む off stage frame (オフ・ステージフレーム) の存在することがわかる。これらの on stage frame と off stage frame が sub frame と言え

る。全体活動フレーム同様、小グループ活動フレームにも on stage frame と off stage frame が存在する。小グループ活動フレームにおける on stage とは、グループ全体に向ける発話のことである。一方 off stage とは、グループ全体に向けた発話ではなく、特定の人或いは人達に向けた発話のことである。しかし、本研究では紙面の制約上全体活動フレームのみを分析対象とする。

図式化すると、以下のようになる。



当然のことだが、1つのメインフレームには、多数の interactive frames と knowledge schemas が存在し、人々がそれらを入れ替えながらコミュニケーションを行う。特に日本語においては、スピーチレベルの選択及びそのシフトはフレームと深く関係しており、スピーチレベルのシフトがフレームの変化をメタメッセージとして伝える機能を持っている。さらに、岡本（1997）、森下（1998）、杉山（2000）では、丁寧体と普通体の使い分けを通して、発話者が現行場面を公的場面として認識しているのか、非公式場面として認識しているのかが区別できる、としている。

しかしながら、スピーチレベルシフトの生起と機能についての研究を可能にしたのが、談話内における「敬語使用」の説明を強調した生田・井出（1983）である。生田・井出は、文レベルに限られた敬語使用の研究は敬語の原則的用法であり、敬語使用の全てを説明することはできない、と論じている。ある談話におけるスピーチレベルの選択が行われる際、もっとも優先されるのは、社会的コンテキストであり、次いで、話者の心的態度、最後に談話の展開という、「要因の優先関係」があると述べている。本研究では、生田・井出の枠組みに従い、分析を行う。また、これまで指摘されたことのない要因があれば、追加する。そして、母語話者との相互行為における非母語話者のスピーチレベルシフトと frame/knowledge schema の関わりを考察しつつ分析を進める。

3.1.3 分析基準

スピーチレベルの分類については基本的には三牧（1996）が母語話者について行った研究の分類に従う。しかし、三牧（1996）と違って本研究では文体レベルで現れるスピーチレベルシフトのみを検証する。非母語話者の場合、語レベルでレベルシフトが現れる確率は非常に低いと思われるので対象としない。文体については次の三種類で分類する。

+ : です、ます体

+ ' : です、ます体+終助詞「よ」「ね」等の付加（行きましたよ）

0 : だ体

とするが、現実的には+と+'の待遇表度の差は+'と0の差に比べれば小さいと思われるので、結果の際+と+'をひとまとめにして、+と0を対立するものとする。

さらに、基本レベルの一定については、接触場面の先行研究に従い、「+レベル」と「0レベル」のうち、より多く用いられたものを基本レベルとして決定した。上仲（1997）と佐藤（2000）は数を数えて結果を出しているが、本研究では、数は出さないが、データからより多く観察されたものを基本レベルと決定した。しかし、データを観察していると、非母語話者同士でも、スピーチレベルの基本は異なることが判明した。基本レベルが「+レベル」の非母語話者と、基本レベルが「0レベル」の非母語話者がいた。したがって、この2つの基本レベルのパターンに基づき、対象者の非母語話者を2つのグループに分け、基本レベルが「0レベル」のF1、F3とF4をグループ1と名づけた。一方、基本レベルが「+レベル」のF2とF6をグループ2にした。

3.2 分析結果 - 全体活動フレームにおけるスピーチレベルシフト -

3.2.1 On stage frame の場合

On stage における発話とは、話題提起者が全員に向けて問題に感じていることや話題を提起する時の発話のことである。全員に向けて発話をする場面は公的場面と言える。母語話者は公的場面（あらたまった場面）では、スピーチレベルの「+レベル」を一貫して使用すると指摘されている（生田・井出 1983）。また、発話アドレスが全体に向けられたとき、母語話者は公式な発話のフレームに基づき、丁寧体を用い、普通体へのシフトは見られないという報告もある（森下 1998）。言い換えれば、on stage frame の場合、社会的コンテキストは公的場面であり、スピーチレベルは「+レベル」で一定するという制約の下におかれる。

本研究では、生田・井出のスピーチレベルシフトにおける 社会的コンテキスト、話者の心的態度、談話の展開、の3つの「要因の優先関係」の枠組みに従う。しかし、on stage frame における発話は先も述べたように、スピーチレベルが「+レベル」で一定するという制約に従うため、社会的コンテキストにしか影響されないとと言える。母語話者の場合、「+レベル」が一貫して用いられるが、非母語話者も同様の発話行動をとるとは限らない。公的場面である on stage frame における非母語話者の基本スピーチレベルは何なのか。また、「+レベル」と「0レベル」の混在はあるのか。あるとすればその理由は何なのかを本章では検証していく。

社会的コンテクストの観点から

以下、非母語話者の on stage の発話の事例を述べる。事例の「F」は非母語話者を意味し、「J」は母語話者のことである。事例は各グループにおいて、2つずつ述べていく。グループ1は、F1、F3とF4のことで、基本レベルが「0レベル」である。また、グループ2とは、基本レベルが「+レベル」のF2とF6のことである。まずは、グループ1から見ていく。

グループ1

【事例1】(F1の場合)

事例1では、F1が「ボランティア」について自分の意見を述べている。On stage frame において、発話アドレスは全体へ向けられているにもかかわらず、スピーチレベルが一貫した「+レベル」ではない。むしろ、「0レベル」へのレベルシフトが観察される。しかしながら、F1の「+レベル」の位置に注目すると、語りの最初と最後は「+レベル」で括られており、最初と最後の部分を除くと全般的に「0レベル」が使用されている。

F1: そうですね。ボランティアする人は、普通の生活にくづける、くづけない？自分があの一働いて、でもあいてる、時は、たとえば、ほかの人も助け合って、だからこれはたましの食事とか、うん、たましも育てて、だから自分が自分に満足する。いつもあーよかった。これをやった。いい事をやった。自分があの一何か自分に満足する。だから、これをたましを育てて、よかったと思う。お金だけじゃなくて、たとえば、人が仕事ないとか、生活のお金に何か、生活できない人はボランティアをする。仕事の変わりにボランティアをする。(省略)で、自分の生活を成立して、あいているときを、じゃほかの人にもちょっと助け合って、これはボランティアになると思うんです

【事例2】(F3の場合)

事例2では、F3が「年の取り方」という話題を提供し、自分の感想を述べている場面である。F1同様、on stage frame において、発話アドレスは全体へ向けられているが、一貫して「+レベル」を使わず、「0レベル」にレベルシフトしているのである。しかしながら、語りの最初と最後は「+レベル」で括られていることはF1のon stage の発話パターンに似ており、注目すべき点である。語りの最初と最後の部分を除き、全般的に「0レベル」が使用されている(しかし、語りの途中で、量的には少ないが、「+レベル」の存在が観察されている)。

F3: 年になるということですね。みなさん、みな若い、若い人とちょっと年を取っている人と{笑う} ごめんなさいね、みなはなれているから、ごめんね{笑う}(省略)年取ると自分の考えがどうなるのか

などと思って、楽しいことあるのかな、思ったんですよ。でも、よく見たらね、あの年齢変わっていても、みななんか楽しくしている？生きてる、いいなと思って、自分でもね。その年頃になったら私もそうなるのかなと思ったんだけど、で、また違う人を見ていて、がっくりとか、死にそうな顔とか、つまらない顔とかいますですよ（省略）すごいいらしている人もいるし、いつもなんか@@@なかんじで、幸せじゃないみたい？でもう一人のおばあさんに話したんだけど、私はね、若い時にすごい美人だったよって言われて、今見て、すごいしわしわなのよ。あなたもなるよ。その時に私は、ええっと、私は12歳かな。「そうですか、こんな肌になりますか」「そうだよ。あなた今びちびち年になるとつまらないのよ」（省略）だから年取りたくない、その時、もう一回子供に戻りたい。で、私のお母さんを見るといつもメイクしているの。いつもあちこちなんかつけるのよ。帽子とか、ブローチとか、日本人みたいなのを。（省略）でお母さんに聞いて、「お母さん、いま年でしょ」「なんで？」「たのしい？」「たのしい？そうね、メイクすればたのしい、メイクのお金なくなればたのしくない」っていわれて{笑う}（省略）メイクしなくなったら私はもう死んだ方がいいっていわれて、どういう意味ですか？

以上、基本レベルが「0レベル」であるグループ1のon stageにおける発話を見てきた。ここでは紙面の制約上、2つの事例しか述べられないが、実際は、F1、F3とF4の3人ともにon stageの発話における同じスピーチレベルシフトのパターンを提示している。全般的に「0レベル」を用いるが、語りの最初と最後の部分だけに「+レベル」を使用することはグループ1のon stage frameにおける発話の共通点である。

次に、基本レベルは「+レベル」であるグループ2のon stageにおけるスピーチレベルシフトを検証する。

グループ2

【事例3】(F2の場合)

以下の事例3ではF2が「テレビの規制」について自分の意見を述べている。F2は、最近のテレビは規制がゆるく、暴力シーンや性的なシーンが多いことに怒りを覚え、自分の意見を全員に向けて述べている場面である。On stage frameの中での発話であることと、発話アドレスは全体へ向けられていることから、レベルシフトをせず、一定の「+レベル」が使用されている。

F2：そうですか。わたしがはじめて来て思ったのが、それだったんですよ。映画館とかとは、自分がなんか選択して行きますから大丈夫ですけど、ティービーはそれではないですよね、つけたらすぐ見られるから、だからティービーであんなことやったら、まあ、なんか大人なら大丈夫だと思います自分が考えて、あそれはいいこと悪いこと、まあだんだん少しは分かって思いますけど、コドミ、子どもに

ついては、あーそれはちょっと、うん困るなと思ったことが多いんです。特に日本のテレビジョン

J1: いや、分かる分かる。分かります。

F2: はいはい。と、前、韓国にいる時、なんか勤労青少年？うん、のカウンセラーを5年ぐらいやりまし
たけど、あの時、ま、あの子ども・ちょっと珍しい子だったと思いますけど、えっと、高校2年生の
子どもなんですよ女の子が、同じ高校2年生の男の子5人に、なんかセックスされたんです。だから
それ、それで女の子は自分、妊娠されたんですよ、あの事故で、事故だわたしはいつもそれはだと言
ったんですけど、その事故で妊娠されて、自分が何するか分からなくて、韓国は睡眠剤ですよねそれ
はまあ一人に多くは売れな売らないんですから、うーん、やっ薬屋に次々に行って、睡眠剤を買って、
死のうと思った子どもが・いたんですよ。あの子の一番親しい子どもがうちに連絡して、なんか会
って、うんいろいろやりましたけど、あ、あの時ですね、あの事故を起こした男の子達が、びっくり
しましたあの男の子達の話が。わたしたちはね、セックスは一对一ではなく、なん、多数といいま
す
か

J1: うん、一对多数

F2: うん、うん一对多数だと思ったと言われましたわたし。それがどうやってそう思ったのと言ったら、
うんビデオ、ビデオ見たらそれだったと。うちらがセックスするのを見たのはビデオテープだ、それ
だけだったと言われましたよ。だからほんとにあの時びっくりしましたけど、それもなんか@@@
の責任じゃないかと思って、まあそれも大人の責任もあったと思います、正しいセックスとか性教育
を、うん、やらなかった・まあ責任もありますけど、それが、うんそんなことがありましたけど、ま
あ全部じゃない・ですけど、でも一人の子でもまあ、ニンリュウの、ニンリュウ？・といいま
す
か
ま世界みんなの一人ですから、うちらが責任、まあとらなきゃならないことだと思います。

【事例4】(F6の場合)

F6 は旅行の目的ではじめて来日した時の経験を語っている。レストランでサンドイッチ
を注文したが、上手に発音が出来ず、「さんのいち」と言ってしまったことから、パンの三
分の一をもらったという話である。事例を見てもわかるように、on stage frame の規範で
ある「+レベル」が用いられている。まれに「0レベル」への逸脱は観察されるが、全般的
に「+レベル」が使用されている。これは、F2 の on stage frame における一定の「+レベ
ル」の使用と同様の発話パターンである。F2 と F6 は、公的場面である on stage frame と
いう社会的コンテクストにおいては「+レベル」を使用することがわかる。

F6: あう旅行に来てはね、辛いとかね思わなかったんですよね。でも、すごくわ、わら、なに？わらち
やったのが結構一杯あります、私の場合はね (省略)パンはね、本当に三分の一に切ってくれたの
ハ、ハ、ハ(大笑い)や、本当ですよ。こんなちさいのパンでしょう。三分の一、こんなくらいですよ。
そのときどうしよう。もう、私の日本語、何？やっぱりだめかな？向こうもあうとまっとうですか
ら。なるですから。後ろたくさんの人並んでいるでしょう。迷惑かなと思って、じゃ我慢して、しま

しょう。お金はね、払って、戻ったら、友達がね、あなたこんな量少ない？とか言って、しょうがない、ここのさんのいちはこの小さい(笑う)。だからね、それは、あとはね、本当に自分はね、悪いえっとこと？全然思わないで、向こうに責める感じで、だからね、あのう若い子本当に。もし中国の、若い子もうけんかになるんですよ。本当。だからね、その以来私すっごく自分で何？おとなしいしないいけないと思って。(省略) 向こうわからない迷惑ですから、もって、だからねもう怖くて言葉も出ないぐらいで、結構ね、一時あります。(省略) 自分外国人ですから。

以上、on stage frame における非母語話者のスピーチレベルシフトを検証した。基本レベルが「0レベル」であるグループ1のF1、F3とF4は、発話が全体に向けられる時、語りの最初と最後の部分だけに「+レベル」を用いることが注目すべき点である。一方、基本レベルが「+レベル」のグループ2は、一定の「+レベル」を使用し、レベルシフトはほとんど観察されなかったのである。On stage における非母語話者のスピーチレベル及びシフトをまとめると表3のようになる。

【表3】: On stage の場合

要因	グループ1	グループ2
社会的コンテキスト	「+レベル」 「0レベル」 「+レベル」	「+レベル」

3.2.2 Off stage frame の場合

Off stage frame とは、全員に聞かせる発話ではなく、個人的な質問や受け答え等をする時の発話のことである。例えば、on stage の発話の場合、話題提起者が語りの途中で質問されたり、特定の人に質問したりすることがある。また、誰かがコメント等を投げかけると、一時的に、発話が語りという構造から外れ、1対1の対話や少人数が加わる会話の構造をとる。これを off stage frame と呼ぶ。また、1対1の対話や少人数間の話し合いのため、様々な要因が同時にスピーチレベルシフトに影響すると思われる。つまり、公的場面である on stage frame のように、スピーチレベルが一定の「+レベル」でなくてはならないという制約が強くなく、社会コンテキストの中でも、性、年齢や社会的地位のような要因が1対1、或いは少人数の発話に見られるスピーチレベルシフトに影響すると思われる。したがって、off stage におけるスピーチレベルシフトを生田・井出が指摘する3つの要因、社会的コンテキスト、話者の心的態度と、談話の展開の観点から検証する。さらに、これらの要因に「優先関係」があるとされていることから、最も優先される社会的コンテキストに次いで、話者の心的態度と最後に談話の展開を検証していく。そして、これまで指摘されたことのない要因があれば追加する。

社会的コンテキストの観点から

生田・井出は基本スピーチレベルを決めるのに、社会的コンテキスト、話者の心的態度と、談話の展開の3つの要因のうち、社会的コンテキストが最も重要だと指摘している。社会的コンテキストは主に、話者と相手の社会的上下・親疎関係、その場の社会的状況、話題となっている事柄の性質、によって決定される。本研究の参加者の親疎関係については、知り合いとは言えるが、親しい親友とは言えない。故に、3.3.3のエスノグラフィックプロフィールを見てみると、全員職業は主婦、学生、パートタイマーなので社会的地位はほとんど変わらない、と言える。また、話し合いのテーマは、参加者自身が提供したものである。しかし、年齢の面では、母語話者の年齢は幅広いことがわかる。これに対して、非母語話者はほとんどが40代で、30代が1人しかいない。年齢は基本スピーチレベルを決めるのに重要な要素だと言われている（Hashimoto1992、宇佐美1995他）。したがって、年齢が非母語話者の off stage での基本レベルを決めるのにどう影響しているかを検証する。そのため、非母語話者（30代 - 40代）をベースに、母語話者（20代 - 70代）を「年上」、「同等」、「年下」の3つに分け、年齢に焦点を当てて、スピーチレベルの選択を検証する。

非母語話者	母語話者
ベース年齢（30代 - 40代）	年上（50代 - 70代）
	同等（40代）
	年下（20代）

以下、非母語話者の off stage の発話の事例をグループ1とグループ2に分けて検証する。まずは、基本レベルが「0レベル」のグループ1の事例を述べる。

グループ1

（母語話者が年上の場合）

【事例5】（F4の場合）

事例5は、J4（70代）とF4（40代）のお金の貸し借りについての会話例である。J4が年上にもかかわらず、F4は「0レベル」を使用している。F4はJ4の親疎関係において、お互い知り合いではあるが、特別親しい友人というわけではない。F4同様、F1とF3も年上の母語話者に対する基本レベルは「0レベル」であることが観察された。一方、母語話者の発話におけるスピーチレベルを見てみると、J4に対しては「+レベル」が使用される。したがって、J4の年齢（70代）が母語話者の基本スピーチレベル選択を大きく左右していると言えるが、グループ1の非母語話者の場合、年上であることが基本スピーチレベルを「+

レベル」に代えるきっかけとはならないことがわかる。

J4: これだけしか出来ないわって、私の能力ではこれだけなのって言って、十分の一。その代わり、返してもらおうと思わない。あなただって、焦げ付いちゃったじゃない

F4: {笑い}

J4: だからね、返してもらおうと思うんだったらね、全額貸しても良いけど、その場合、ちゃんとね、その人が書いて判子押したって、そんなもの全然役に立たない、

F4: たたないのね {笑い} 「0レベル」

J4: だからね、なんだったらあげるつもりで、十分の一、そういうあれで、もう過ぎちゃたことだからね、そのかわり

F4: でもね、この人、私十万円借りるする前に、もう十万円あげちゃったよ。あげたの 「0レベル」

(母語話者が同等の場合)

【事例6】(F1の場合)

事例6では、J3とF1が共に40代で、それぞれの体質について話している。会話のやり取りを見てわかるように、F1は「0レベル」を用いて会話を進める。年齢が同等の場合、F1同様、F4とF3も「0レベル」を基本レベルとして選択する。

F1: でもあの、やせ、うーん、やすい? 「0レベル」

J3: 太りやすいし

F1: やせ 「0レベル」

J3: やせやすい。やせやすくはないけど、太りやすいし、戻すことはそれなりに戻る

F1: でも私太りやすいし、戻るのはもうすごく大変。なかなか、もうすごいよ 「0レベル」

(母語話者が年下の場合)

【事例7】(F3の場合)

この事例は、子供の教育についての会話の1例である。F3(30代)が年下に当たるJ7(20代)と「0レベル」を用いて、会話を進めている。F4とF1も、年下の母語話者と会話をする際、「0レベル」を基本レベルとして使用することが観察された。

J7: 少ない? えー、知らなかった。えー、変だよねえ

F3: 年少年少 「0レベル」

J7: え、この間に年中があるの?

F 3 : うん？

J 7 : 何歳から入れるんですか？

F 3 : 4歳から

「0レベル」

事例5から7まで、基本レベルが「0レベル」であるグループ1のF1、F3、とF4の3人の発話における年齢とスピーチレベル選択の関連性を見てきた。以上の事例を見てもわかるように、グループ1の3人の基本スピーチレベルの選択に年齢は影響を及ぼさないことがわかる。母語話者の場合、基本スピーチレベルを決めるのに年齢が大きく影響するとされているのに対し、この3人は、年齢に関係なく「0レベル」を用いる。では、グループ2の非母語話者の場合はどうだろうか。

次に、グループ2のF2とF6の場合、年齢が基本スピーチレベルを決めるのにどのように影響するのかを検証する。

グループ2

(母語話者が年上の場合)

【事例8】(F2の場合)

以下の事例では、F2とJ4がお金の貸し借りについて話しているが、J4(70代)に対してF2(40代)は「+レベル」を使用している。これはグループ1が、年上の場合用いる「0レベル」とは明らかに異なるパターンである。母語話者がJ4に対して選択するスピーチレベルと同じである。F2同様、F6も年上に対しては、「+レベル」を用いることが観察された。

J4: ゼロ円で戻ってこなくても、やっぱり自分の身内にだんだん落ち目になっていく人見ていられませんよね。こちらが普通の生活ねえ、やってたとすると

F2: そうですねえ。 はい 「+」レベル」

J4: だから、そりゃあ、お身内だからいいけど、そういう気持ちをどの方どの方尋ねてきて頼まれた人全部やったら、こちらが持ちませんよね

F2: え、その問題なんですけど、で「かえして」という時、自分とほんとに親しく、なんか「+レベル」

J4: いや、かえして

F2: できない人にそれが言えるかどうか、言えますか？ 「+レベル」

(母語話者が同等の場合)

【事例 9】(F2 の場合)

事例 9 では F2 (40 代) が、年々増加している日本のホームレスについて自分の意見を述べており、J6 (40 代) に対して、ほとんど「0 レベル」を使用していることがわかる。F6 (40 代) も年齢が同等の母語話者に対して「0 レベル」を基本レベルとして用いることが観察された。

J 6 : じゃもしそれ、噂を聞いてそれが 10 人 20 人 30 人

F 2 : それがね、考えましたうちらも 「+レベル」

J 6 : うーん、

F 2 : それを考えましたけど、きっとね、あの人が韓国人だったら次の日きっと 2 人位は連れてくる、
「0 レベル」

J 6 : {笑い} そうか

F 2 :なのに、日本人は絶対それはしない! 「0 レベル」

(数人): あー、

F 2 : 2 人が 3 人連れて行けば、自分ができないから。自分ももらえないから、日本人だったら絶対
それはやらない 「0 レベル」

F 4 : {笑い}

F 2 : と言ったの、韓国人ならね、自分がいくらもらえなくても、「一緒に行こう、あそこに行けばね、食
べるものがあるよ」とかいって 「0 レベル」

(母語話者が年下の場合)

【事例 10】(F6 の場合)

事例 10 では、F6 (40 代) が J10 (20 代) に、お茶の水女子大学大学院生が主催する大人 LARP について尋ねている場面である。「+レベル」の混用もみられるが、基本的に「0 レベル」を使用していることがわかる。F2 も F6 同様、年下に対して「0 レベル」を基本スピーチレベルとして選択することが確認された。

J10 : ねー、みなさん、でも ありがとう。これ、なに? あ、@@、ね

F6 : (J10 と中国語で話す)あ、ありがとう 「0 レベル」

J10 : @@だね。でも、すごい努力してみんな、日本語が上手になっている

F6 : あおう、このクラスはなに? 周りの外国人の主婦も参加してます? どうして知っているの?
「0 レベル」

J10: あ、これはあのう、夏休みにちょっとあのう、短いクラスをやったときに、いろいろあのう、あのう、
 @@を@@たりして、みなさんみてきてくれた

F6: そうですね。　　そういえば、私も去年の夏休み前、　　でチラシみて　　「0レベル」

J10:　　うん　　うん、うん　　あ、そう。それ、それ、
 今年も@@

F6: あ、そうか　　「0レベル」

以上、グループ2のF2とF6の基本スピーチレベルの選択に年齢がどのように影響しているかを見てきた。グループ2の2人は、年上の母語話者に対して「+レベル」を使用するが、年齢が同等や年下の場合「0レベル」を用いている。これは、母語話者の発話に観察されたスピーチレベル選択のパターンと同じ、と言えるが、母語話者の年齢に関係なく「0レベル」を使用するグループ1の3人の発話パターンとは異なる。

本研究の対象現場や対象者においては、off stage frame では、年齢が社会的コンテクストとして基本スピーチレベルの選択に一番強く影響すると思われる。しかし、社会的コンテクストだけではスピーチレベルシフトのメカニズムは解明されない。そのメカニズムを解明するには話者の心的態度と、談話の展開の要因からスピーチレベルシフトを検証する必要がある。したがって、次に、スピーチレベルシフトの2つ目の要因とされている話者の心的態度を検証していく。

話者の心的態度の観点から

先にも述べたように、スピーチレベルシフトのメカニズムを探るためには、談話内におけるスピーチレベルの使い分けに注目する必要がある。言い換えれば、社会的コンテクストが一定にもかかわらず、談話内においてはスピーチレベルのシフトが観察される。その理由を、社会的コンテクスト以外の要因で説明しなければならない。

生田・井出では、母語話者は、談話内で相手や話題となっている事柄に対する話者の心的態度の変化を表明するため、スピーチレベルをシフトさせる、とされている。厳密に言えば、「0レベル」へのシフトは心的距離の短縮、いわば、同調や支持の気持ちを表し、「+レベル」へのシフトは心的距離の伸長を表す、とされている。

では、心的態度の変化は非母語話者のスピーチレベルシフトにどのように現れているのだろうか。基本レベルが「0レベル」であるグループ1のF4、F1とF3は、どのように心的距離の短縮を表しているのかを検証する。

グループ1

心的距離の短縮を表す例

グループ 1 の 3 人の発話データを心的態度の観点から検証すると、大変注目すべき点が浮き上がってくる。グループ 1 の 3 人は、「0 レベル」から「+ レベル」にシフトすることによって心的距離の短縮を表すように見えるのである。換言すれば、「+ レベル」にシフトすることで、親しみや同調、支持の気持ちなど、相手に対する共感を表す。では、その事例を見てみよう。

【事例 11】(F4 の場合)

基本レベルが「0 レベル」である F4 が、同じ 40 代である J6 との会話の際も普段は「0 レベル」を用いる。しかし、事例 11 では、F4 が「そうですね」を使うことで、J6 の発話への支持の気持ちがうかがえる。つまり、J6 が話した内容に同調することをあえて「+ レベル」にシフトして伝えていると考えられる。この事例の場合、「そうだね」の代わりにたまたま決まり文句のような役割を持つ「そうですね」を使ったということも考えられる。しかし、F4 と J6 の他の会話例では、「そうね」や「そうだよ」のような例もあることから「そうですね」のような「+ レベル」へのシフトが持つ機能は、F4 のレパートリーにあると考えられる。

J 6 : あ・そしたら、例えば日本人に対しては、自分がその勉強する時は、ほとんど勉強するんだと思うからそのー

F 4 : ちゃう、あのー 「0 レベル」

J 6 : 気・気を使わないんだよね？

F 4 : そうですね 「+ レベル」

このように「+ レベル」にシフトすることによって相手発話への支持や同調の気持ち、いわば、心的距離の短縮を表す発話例は F1 と F3 の発話にも確認された。母語話者の「+ レベル」から「0 レベル」へのシフトというパターンとは異なり、基本レベルが「0 レベル」であるグループ 1 の非母語話者は「0 レベル」から「+ レベル」にシフトすることによって同様の気持ちを表すと言える。

次は、基本レベルが「+ レベル」であるグループ 2 の非母語話者の場合を見てみよう。

グループ 2

心的距離の短縮を表す例

【事例 12】(F6 の場合)

事例 12 は、J6 (40 代) が F6 (40 代) に音声録音を依頼している場面である。F6 が笑い

を伴いながら「0 レベル」にシフトしたことによって、「依頼場面」の緊張が緩和され、2 人の会話が共感度を深めていく。F6 が「0 レベル」を用いることで、「依頼する」身である J6 の負担は軽くなり、心的距離の短縮に繋がったと言える。

J6：すいません、そういう形でちょっとあのう取らしてもらいたいんですけど、いいですか

F6：いいですよ。私も聞きたいです、自分の声。どうゆうふうくに日本語をしゃべっているか{笑い}

「+レベル」

J6：あ、それはいい勉強になりますね{笑い}

F6：はい、でも恥ずかしい{笑い}

「0レベル」

基本レベルが「+レベル」であるグループ2の2人は、「+レベル」から「0レベル」にシフトすることによって心的距離の短縮を表すことがわかる。これは、母語話者と同じパターンであると言える。

以上述べた事例は非母語話者の心的距離の短縮のものだったが、逆に、彼らは心的距離の伸長をどのように表しているのだろうか。次は、非母語話者のスピーチレベルシフトにおける心的距離の伸長を検証する。

グループ1

心的距離の伸長を表す例

母語話者との相互行為におけるグループ1の非母語話者の心的距離の伸長の例は1つも観察されなかった。しかしながら、面白いことに、非母語話者同士の会話例を見てみると、心的距離の伸長が目的で、「0レベル」から「+レベル」へのシフトの事例が多く観察された。その1つを述べる。

F4：あの中国一人っ子ですから、5月6月のとき、あの薬・おなかに入れて、あの子供をおなかの中に殺して、産むのね

F3：それはいけないこと

「0レベル」

F4：いけないことでも国決めたのことですからしょうがないから薬はあるの

F3：命、殺すっていうか、殺人と同じじゃないですか

「+レベル」

F4：そうですね、でもこれどう、あの中国違うのね

F3：一番、赤ちゃんは殺しちゃいけませんよ

「+レベル」

これは、「0レベル」が基本であるF3とF4の会話例である。ここでは、中国の一人っ子政策のため中絶する人がいるというF4の話に対し、F3が反対意見を示す。ここでの「0レ

ベル」から「+レベル」へのシフトは自分の意見を強調し、同時に心的距離を広げるためのストラテジーと考えられる。しかし、同様のストラテジーは母語話者との会話には観察できなかつた。その理由については、母語話者と非母語話者の相互行為における power relations が関わっている可能性が考えられるため、考察のところで詳しく述べる。

次は、グループ2の心的距離の伸長を表す事例を見てみよう。

グループ2

心的距離の伸長を表す例

基本レベルが「+レベル」であるグループ2のF2とF6は、生田・井出が指摘する通り、「0レベル」へのシフトは心的距離の短縮、いわば、同調や支持の気持ちを表し、「+レベル」へのシフトは心的距離の伸長を表す。だが、母語話者が年上の場合「+レベル」を基本レベルとして用いるので心的距離の伸長を表す際、「0レベル」にシフトすることが確認された。

【事例13】(F2の場合)

事例13はお金の貸し借りについての会話例である。F2はJ6に対して同世代であることから、「0レベル」を使用することが多いが、J6の質問の返答の際、「0レベル」から「+レベル」にシフトする。その理由として、下線が引いてある発話内容であることが考えられる。J6は、「日本人である私たちの考え」と「日本人でないあなたたちの考え」という対立関係を示す言葉がF2の発話に影響したと考えられる。なぜなら、非母語話者は参入側として母国でないことと、第2言語や外国語である日本語で生活しなくてはならないことを一般知識としてわかっている。しかし、このように日本人が多数派である状況の中では特に、上記のような対立関係が強調されると、当然ながら気持ちが引いてしまうことも考えられる。事例13では、F2が、「+レベル」にシフトしてからしばらくJ6に対して「+レベル」を持ちつづけることで心的距離の伸長を表したと言える。

J6: つまりね、私も思うのは、私も似たような経験したことあるけど、日本人の中で「返す」と言って返さないっていうことは、とってもまずいことだと私も思うし、「返す」と言った人も思、う、

J4: そう

J6: ですね? 「返す」と言ったのに返せないということもとてもまずいことだと私達は思うので、あの一、やっぱり分からないのは、私達っていうか私は思うので、「返すよ」って言いながら、結局返さない状況が起きてしまうわけでしょう?みんなの国では。その時に、その人に対する評価はどうなるの? 覚悟はしていたにしても、例えば友達が「返す」って言って、返さなかった場合、その人に対する評価はどうなるの?

F2: うん? 「かえす」といって、え、 「0レベル」

J6: うん、もし、あの、困ってるから仕方ないって思ってしまうの

F2: そうですね、友達が最初は「かえしてくれる」と言うんですけど、ちゃんと 「+レベル」

以上、事例 11 から 13 まで心的態度の観点から非母語話者のスピーチレベルシフトを検証した。心的態度を心的距離の短縮と、心的距離の伸長の 2 つの観点から検証したが、グループ 1 は、「0 レベル」から「+レベル」にシフトすることによって心的距離の短縮を表すことがわかった。一方、グループ 2 は母語話者同様「+レベル」から「0 レベル」にシフトすることで心的距離の短縮を表す。心的距離の伸長だが、グループ 1 の場合母語話者との相互行為における例は観察されなかったが、非母語話者同士の会話例はいくつも確認された。グループ 2 の心的距離の伸長は、「0 レベル」から「+レベル」へのシフトに現れている。しかしながら、事例 13 は年齢が同等の場合の例である。母語話者が年上の場合「+レベル」を基本として選択するグループ 2 は、「0 レベル」にシフトすることによって心的距離の伸長を表す。その事例を 1 つ述べる。

F4: このことを日本人にあっては、何の気持ち、私分らないから、でも外国人外国にきてこのことありましたら、全然違う意味で、あの感動するじゃない? ねえ、一年経ったよー、普通の人、本当は払わなくてもいいんですけど、でも、そんなに自分はお金もちの人じゃないし、十万円ぐらいだったらほんと、なんとなく自分ヶ月何もしなくても良いの感じで、あの、これは私すっごく印象的だったのね。

J4: それ本当の日本人よ {みな笑う}

F2: じゃ、先の三人は本当の日本人じゃない? 「0レベル」

この会話例では、J4 が「それ本当の日本人よ」を言うことで、「本当の日本人はみな良い人」とラベル付けしている。J4 (70 代) に対して、普段「+レベル」を用いる F2 (40 代) が、J4 のこの発話内容に対して、「0 レベル」を用いて反論し、心的距離の伸長を表していると言える。

ここまでの分析の流れからは次のようなことが言える。まずは、談話全体で基本となるスピーチレベルが社会的コンテクストによって決定される。基本レベルが決定されてから、心的態度の要因が機能する。それには、相手の考慮したり、自分の気持ちを表したりするような、いわば、談話を円滑に進めるためのストラテジーが潜んでいる。最後に、「要因の優先関係」において の要因とされている談話の展開の要因が働くと考えられる。生田・井出によると、 の話者の心的距離の変化の表明は、常に談話の相手を考慮してのことであるから談話のユニットの展開を明確に表示する機能に優先されると考えられるのである。

談話の展開の観点から

談話内の話の流れ、或いは、理論の展開を明確に示すため、スピーチレベルをシフトする場合がある。ここでは談話の展開の中でも下位分類として、「質問する時」と「話題の変換の標識として」の2つの要因を検証する。

基本レベルが「0レベル」のグループ1は、「0レベル」から「+レベル」にシフトすることによって談話の展開を表す。一方基本レベルが「+レベル」のグループ2の2人は、「+レベル」から「0レベル」へのシフトによって談話の展開を示す。以下、各グループの事例を述べる。

グループ1

質問する時

【事例14】(F3の場合)

事例14では、F3(30代)がJ3(40代)に結婚式の時にお祝い金としていくらあげるかを聞いている場面である。基本レベルが「0レベル」であるF3は質問をする時、「+レベル」にシフトする。質問する際「+レベル」にシフトするパターンがF1とF4の発話にも観察された。

F1: じゃ一人は、3万。二人行くと6万?

J3: そういや、なんか、奇数なんですよ、日本って。なんか二人だと五万とか

F3: 結婚式もそうですか? 「+レベル」

J3: そう

J4: 大体そうですよ

F3: 三万と五万、二人で 「0レベル」

J6: これがね、決まってないけど、あるこういう数字が。中国なんかとかで(省略)こういうのはどうなんですか?

次に、グループ2の場合を見てみよう。

グループ2

【事例15】(F2の場合)

事例15では、J1(60代)とJ2(40代)がテレビの規制について話している。F2は、年上のJ1に対し、「+レベル」を使用することが多い。しかし、今回の事例のように質問す

る時は「0レベル」にシフトすることが他にも観察された。一方、相手は年齢が同等や年下の場合、「0レベル」が基本レベルのため、質問する時は「+レベル」にシフトすることが観察された。

J1: ですがヌードだとかね、ちょっと毛があるとダメだとかね(省略)10年の間に大変変わりましたね、ノーカットで今、この一週間一ヶ月くらいの間だと思うんですが、ノーカットで今、あの一映写ができるようになりまして

F2: あ、映画館で?

「0レベル」

J1: 映画館で

F2: うん、あのそうではなく映画・・・

「0レベル」

J1: いやいやだからということは、映画も一緒に、テレビも始めは相当な規制があったと思うんですよ。ところが、そういうもう、何とかの、それがやっぱりその・西洋文化の悪い面・だとわたしは思うんですけども、要するにもうオープンであからさまですよね、特にアメリカ文化なんてのはそういうセックス場面だとか、そういったものは平気でやるわけですよ、だからその影響でまた一方おかしいじゃないかっていう人がいて、でそれがだんだんだんだんっていうことで、だからあんまりひどいってのは、あのやっぱり、むしろその放送する側の責任において考えなさいということになってるんですよ

非母語話者のグループ1は「0レベル」から「+レベル」に、グループ2は年上の場合、「+レベル」から「0レベル」に、年齢が同等や年下の場合、「+レベル」にシフトすることで談話の展開を示す。質問をする時レベルシフトさせることによって話題が展開される。しかし、レベルシフトの仕方は非母語話者同士でも異なる。次は、談話の展開の役割を果たす話題の変換の標識としてのスピーチレベルシフトをどのように用いるかを検証する。

話題の変換の標識として

生田・井出では、日常の現実の談話、特に会話などにおいては「文」の切れ目がはっきりしていないことが多いため、話者の頭の中には談話の下位区分としては内容的に統一のとれた「小話題」がいくつかある。こういった「小話題」の組み合わせで談話が構成される、と言われている。話題の変換には、大きな話題の変換と小話題の変換があるが、本研究ではその両方をまとめて話題の変換部分としてみなす。

グループ1

【事例 16】(F3 の場合)

事例 16 は、子供の教育についての会話例である。F3 のスピーチレベルシフトに注目して欲しい。他のメンバーと同じ話題について会話に参加している時は「0 レベル」を用いるが、新しい話題を導入する時「+ レベル」にシフトしている。F3 は話題の変換の標識としてスピーチレベルをシフトさせていることがわかる。グループ 1 の F1 と F4 も話題の変換の標識としてスピーチレベルを「+ レベル」にシフトさせるというストラテジーを用いることが観察された。

F 4 : びっくりするよわたしもびっくりしたどうしようあのお母さんもね、どうしましょうとか言われたら、あの、向こうの男も責任持っていないみたいなの実際はね

F 3 : あのお母さんもね、うちの子 「0 レベル」

J 1 : それはな・ちょっと今ね、話発展してきてここはね、要するに教育の問題だと。要するにそういうのはその一、世の中悪いんだけども、そういうの一をうまく補導してやるのはね、お母さんがほとんど家にいないから、自分の一子どもほっ・ほっほったらかしていかすね、(省略) ということしてないからそういうことになるんだよと、まそういうのが、あの一ね、彼女のあれ一意見、あ彼女の意見なんだけども、そういうことで

F 2 : うん、そうですね、うん

F 3 : うちのお姉さんもね、私も、一ついけないことがあったんですよ(省略) 「+ ' レベル」

グループ 2

【事例 17】(F2 の場合)

以下の事例 17 は、「お金の貸し借り」についての会話例である。基本レベルが「+ レベル」である F2 (40 代) は、J6 (40 代) に対して同じ歳代ということから「0 レベル」を使用する。しかしここでは、新しい話題を導入する時「+ レベル」にスピーチレベルをシフトさせている。つまりここでは、スピーチレベルシフトは話題変換の標識であると言える。事例 17 は年齢が同等の母語話者と F2 の事例だが、年上に対し、話題変換としての「0 レベル」へのシフトは観察されなかった。言い換えれば、年上の母語話者との会話の時、F2 と F6 は「+ レベル」を基本レベルとして選択し、話題変換の際、「0 レベル」にシフトしないということである。

F 2 : 私はね、基本的な感覚は同じだと思う。で、私も韓国人なんだけど、人にね、「かえしてくれる？」とはあんまり言えないの。で、それは、みんな 「0 レベル」

J 6 : か、かしてくれる？

F 2 : うん、そ、かしてくれる 「0 レベル」

J 6 : ごめん、ごめん

F 2 : でもね、ほんとに自分が困った、それは普通の生活の人の話、でも、それじゃないの、人に「かしてくれませんか？」と言う人、普通じゃないじゃないの、ほんとに困ったからだよ。それを考えてください
と言うの 「0 レベル」

J 6 : うん、それ

F 2 : で、さっきの話のように、私カテドラル、椿山荘の前のカテドラル教会なんですけど、それが10
 時は日本人のミサなんですよ(省略) 「+ レベル」

事例 16 と 17 では話題変換の標識として非母語話者がどのようにスピーチレベルをシフトさせるのかを見てきたが、その結果、グループ 1 とグループ 2 が共に「+ レベル」にシフトすることで話題変換を示すことがわかった。

以上、社会的コンテクスト、話者の心的態度と、談話の展開の観点から上級非母語話者の off stage におけるスピーチレベル及びそのシフトの事例を並べてきた。これらの要因と非母語話者のスピーチレベルシフトを表でまとめると次のようになる。

【表 4】: Off stage の場合

要因		グループ 1	グループ 2	
社会的コンテクスト (年齢)	年上	「0 レベル」	「+ レベル」	
	同等	「0 レベル」	「0 レベル」	
	年下	「0 レベル」	「0 レベル」	
心的態度	心的距離の短縮	「0 レベル」 「+ レベル」	年上	事例なし
			同等・年下	「+ レベル」 「0 レベル」
	心的距離の伸長	事例なし	年上	「+ レベル」 「0 レベル」
			同等・年下	「0 レベル」 「+ レベル」
談話の展開	質問する時	「0 レベル」 「+ レベル」	年上	「+ レベル」 「0 レベル」
			同等・年下	シフトしない
	話題の変換の標識として	「0 レベル」 「+ レベル」	年上	シフトしない
			同等・年下	「0 レベル」 「+ レベル」

しかし、当然のことだが、これらの要因は母語話者のスピーチレベルシフトを説明できるが、非母語話者のそれを説明し切れてないのである。そこで、本研究では、生田・井出の枠組みで説明できなかったものの中から power relations の観点を用いて、記述できるものを述べていく。

Power relations の観点から

ここでいう power relations とは、社会関係における権力のことである。事例を述べる前に、language(言語)と power(権力)の関係について述べておきたい。Power は様々なやり方で示されるが、言語を通じて示されることもよくある。例えば、親はよく子供に対して、両者間の power relations がはっきり現れることばを使う。親の話し方が両者間に power dynamics を生み出し、power differences を強調する。では、本研究の対象現場における母語話者と非母語話者の相互行為の場合はどうだろうか。本章の始めのところにも述べたが、どの相互行為においても、frame と knowledge schema の関わりによって物事が言語化される。非母語話者の文化や言語の面での knowledge schema は、母語話者とは異なる。これは、医者と患者の持つ knowledge schema の違いにも例えられる。社会医学者の Kleinman (1980) や人類医学者の Mishler (1984) が医者と患者の相互行為における knowledge schemas の違いが、両者のコミュニケーションに与える影響を研究している。Tannen (1993) はこの knowledge schemas の違いを divergent knowledge schema と呼んでいる。

厳密に言えば、母語話者と非母語話者の相互行為における日本文化・日本語の knowledge schema の違いがスピーチレベル及びそのシフトの使い方にも現れる。故に、こういった日本文化・日本語を L1 として持っている母語話者と、L2 や外国語として日本文化・日本語を習得してきた非母語話者の間に power dynamics が生じる。この power dynamics が生じる原因は、母語話者と非母語話者の両者にある。母語話者の発話が power relations に繋がるのは、非母語話者の日本語を評価する時と「日本」が強調された時の 2 つであることが本研究のデータから観察された。例えば、母語話者が非母語話者の日本文化・日本語についての知識を評価する場合を考えてみよう。「日本語が上手ですね」という言葉は、言語形式にだけ注目すると単なる評価だが、実際は違う機能を持っていると考えられる。評価をするためにそれなりの評価する「資格」を持っていなければならない。簡単に言えば、日本文化が母文化であり、日本語は母語である日本人は日本文化・日本語について評価できる資格を持っているのである。結果として、評価する者とされる者との間に上述したような power dynamics が生じ、それが power relations に繋がる、と考えられる。

一方、日本語・日本文化についての知識が評価された非母語話者の発話にも変化が現れ、それがスピーチレベルシフトによって提示されることも多く観察された。非母語話者は、評価できる資格を持つ母語話者の knowledge schema に一步近づくことができたこと、感謝の気持ちを表し、スピーチレベルをシフトさせるのである。結果として、非母語話者の発話にお

けるスピーチレベルシフトが原因で power relations が生じるのは、日本文化・日本語について尋ねる時と、日本語が理解できない時の2つである。

ここでは、power relations が非母語話者のスピーチレベルシフトにどう現れているのかを検証する。そのため、先に述べた4つの下位分類を用いる。

母語話者の発話が原因で生じる power relations

- . 日本語が評価された時
- . 「日本」が強調される時

非母語話者の発話が原因で生じる power relations

- . 日本語・日本文化について尋ねる時
- . 日本語が理解できない時

ここまでは非母語話者を2つのグループに分けて、スピーチレベルシフトを検証してきた。しかし、これから述べる事例は全員に一樣のものが観察されたので、グループ分けはしない。また、紙面の制約上1つの下位分類につき、1つの事例をとり上げる。まずは、母語話者の発話が原因で生じる power relations を検証する。

母語話者の発話が原因で生じる power relations

- . 日本語が評価された時

【事例18】(F3の場合)

事例18では、母語話者が、日本語が上手になったF3の日本語を評価している。F3は「0レベル」を基本レベルとして選択することは今までのいくつかの事例を見てもわかる。F3は社会的コンテキストとして年齢も関係なく「0レベル」を基本レベルとして用いる。しかし、事例18の場合「+レベル」にシフトしている。その理由としては、日本語が評価されたからとしか説明がつかないのである。つまり、これは日本語が評価されたことに対するレベルシフトと言える。このような事例はF3だけではなく、対象者の非母語話者全員に観察されたものである。

J8: 奥様って感じ

F3: もうおばさんになった

「0レベル」

J3: あ、ある、ある、ある

J10: なんか、ちょっと違いますか?

J3: {わらう}

F3: そんなことないもんね

「0レベル」

J3: いや、でもおとなしかった {わらう}

J10: すごいさ、ゆったりとか

J6: はっきり言って、いつもの F3 と比べたらというのもあるけども、本当に日本人と同じ感じがする

J3: そう、そう、そう、そう

F3: そんなことないですよ 「+」レベル」

J3: 英語でなんかゆった。なんか単語をゆったんですよ。あ、違う。何だっけ? あのーなんか聞かれたんで、何だっけ?

F3: 私もちっと忘れちゃったんですよ 「+」レベル」

J3: そのときになんか、私あの英語の単語がわからなくて、ちよっとまってください@@@

F3: あれ何でしょう? ちよっとそのとき難しいのはなしですよ 「+」レベル」

。「日本」が強調された時

【事例 19】(F2 の場合)

事例 19 では F4 が来日して苦労したことと、とてもやさしい日本人に出会って感動したことの 2 つについて話している。J4 がやさしい日本のことを指して「それ本当の日本人よ」と返答することで、本当の日本人はみなやさしい人、と評価している。この発言に対して、F2 の発話に注目して欲しい。J4 (70 代) に対して、普段「+レベル」を用いる F2 (40 代) が「0 レベル」にシフトする。これは、J4 の発話に対してわざと「0 レベル」を用いたものだ、と思われる。なぜなら、F2 は J6 の発話に対して違和感を覚えたと考えられる。F2 の発話内容に注目するとよくわかるが、故に、発話を「0 レベル」にすることによって心的距離を伸長したと言える。事例 13 を見ても明らかだが、このように「日本」に関係のある人物などが強調された時、非母語話者はスピーチレベルをシフトさせることが他の事例でも観察された。

F4: このことを日本の人にとっては、何の気持ち、私分らないから、でも外国人外国にきてこのことありましたら、全然違う意味で、あの感動するじゃない? ねえ、一年経ったよー、普通の人、本当は払わなくてもいいになるですけど、でも、そんなに自分はお金もちの人じゃないし、十万円ぐらいだったらほんと、なんとなく自分一ヶ月何もしなくても良いの感じで、あの、これは私すっごく印象的だったのね

J4: それ本当の日本人よ {みな笑う}

F2: じゃ、先の三人は本当の日本人じゃない? 「0 レベル」

非母語話者の発話が原因で生じる power relations

・ 日本語・日本文化について尋ねる時

日本語について尋ねる時の事例

【事例 20】(F4 の場合)

F4 の基本レベルが「0 レベル」である。つまり、年齢などは関係なく F4 の場合「0 レベル」が多く用いられる。しかし、事例 20 では自分の経験を話している途中「おろす」という日本語が正しいかどうかを確認するため、「+ レベル」にシフトをする。確認をする時、「+ レベル」にシフトすることがわかる。このような事例はグループ 1 の非母語話者に多く観察された。

F4: でも一話しないときもある。わたしはねみかーかん前に、あのーこう電話あったのね、もう一年以上会ってないの@@日本人ですから、だからわたしに電話して、あのー漢方薬のわたし前かん漢方薬やっていたから、F4 さんいい漢方薬ないかななんのなんのこと自分の子ども、あのー中学校で、妊娠したのね。だからあのー、おろ・おろすですか? 「+ レベル」

J1: うん

日本文化について尋ねる時の事例

【事例 21】(F3 の場合)

F3 (30 代) の基本レベルが「0 レベル」である。J3 (40 代) に対しても「0 レベル」を使用することが多い。事例 21 は、J3 が七五三のお祝いについて話題提起をしたあと、七五三に詳しくない F3 は個人的な質問をしている場面である。いつもなら F3 は質問する時「0 レベル」を用いるが、日本語や日本文化について聞く時は「+ レベル」にシフトする傾向にあることが観察された。

F3: 女の子五歳ですか? 「+ レベル」

J3: 男の子五歳

F3: あっ。来年ですね金ちゃんは 「+ レベル」

・ 日本語が理解できない時

【事例 22】(F3 の場合)

事例 22 は、F3 (30 代) が J8 (20 代) の会話例である。F3 の基本レベルは「0 レベル」である。しかし、この事例の場合、J8 が聞いた質問が理解できなかった時、スピーチレベルを「+ レベル」にシフトさせる。日本語について聞く場合と他のことについて聞く場合と、F3 のスピーチレベルシフトの仕方は異なる。日本語が原因ではなく、他のことが原因で理解

できなかった場合は「+レベル」へのシフトは観察されなかった。したがって、日本語が理解できなかった時、「+レベル」にシフトをさせることが言える。事例 22 のような会話例は F3 だけではなく、このような事例は他の非母語話者の発話においても観察された。

J 8 : 今のあのー、今のお話みたいに、そのーわたしはこうだとテレビから、テレビを見てこうだと思ってた、でも実際は違ってたっていう経験って、ありますか？

F 3 : え・え・もう一度お願いします 「+レベル」

J 8 : えっとテレビを見て、えーF 2 さんみたいに、F 2 さんは日本人はみんなこういう生活してるんだと思ってた。それは一種のステレオタイプですよ

F 3 : は・・はい。わたし半分半分 「0レベル」

J 8 : 半分半分？

F 3 : 映画ですから、あ・すぐオーバーもあるし、なんか正しいもあるし、だから・こうなってます 「+レベル」

J 8 : うんうん

以上、上級非母語話者のスピーチレベルシフトの要因について詳しく述べてきた。生田・井出が指摘するスピーチレベルシフトの 3 つの要因、故に、本研究のデータから浮かび上がった power relations の観点も取り入れつつ記述してきた。次節では、これまで述べてきた非母語話者のスピーチレベルシフトをまとめて、その談話進行上の機能を検討する。

3.3 考察

母語話者との相互行為における上級非母語話者のスピーチレベルシフトを on stage frame と off stage frame のフレームの観点から、社会的コンテクスト、心的態度、談話の展開と、Power relations の 4 つの要因を用いて説明してきた。そのため以下では、非母語話者のスピーチレベルシフトの機能と knowledge schema の関わりをそれぞれ on stage frame と off stage frame に分けて述べる。

3.3.1 On stage frame の場合

Bateson, G. (1972) はコミュニケーションには 3 つのレベルがあると述べている。指示的なレベル (denotative level)、メタ言語的なレベル (metalinguistic level) と指標的なレベル (metacommunicative level) である。例えば、指示的なレベルでは「あなたは馬鹿だ」と言っても、指標的なレベルでは、「冗談」という解釈も可能である。言い換えれば、指標的なレベルには、コミュニケーションの意図を伝えるメッセージが含まれており、そのメッセージをフレームとも呼ぶ。Tannen (1984) は、フレームとは、コミュ

ニケーションの意図を伝えるための上位的なメッセージであると定義づけている。通常人々は、あるフレームから違うフレームへ移行する時、何らかのシグナルを送る。シグナルの仕方は様々だが、日本語においては、スピーチレベルをシフトする時、フレームの移行というシグナルがメタメッセージとして含まれている場合もある。換言すれば、丁寧体と普通体の使い分けが、発話者が現行場面をどのように認識しているのか、がわかる。

例えば、本研究の対象となったグループ討論の場合、母語話者はそれを公的な場面として認識している。と同時に、公的場面というメインフレームの中には、全体活動フレームと小グループ活動フレームのサブフレームにおける発話行動の違いも識別できる。厳密に言えば、それぞれの on stage や off stage の発話においても、意識しながらスピーチレベルを選択し、シフトをする。つまり、スピーチレベルシフトを指標的なコミュニケーションの手段として使いこなし、多数の interactive frames において円滑なコミュニケーションを行っている。これらの発話行動の全ては、母語話者の knowledge schema の一環である。詳しく述べると、全体活動フレームで on stage の場合、発話アドレスが全体に向けられているので、母語話者はスピーチレベルを「+レベル」の丁寧体に保ち、シフトはしない。森下(1997)は、発話アドレスが全体で「0レベル」へのシフトは見られないと報告している。

では、非母語話者の場合はどうだろうか。非母語話者の場合、日本語が母語でないため、当然ながら母語話者の母語としての knowledge schema と非母語話者の第2言語や外国語としての knowledge schema にはギャップがあり、それは divergent knowledge schema とも言える。結果として、非母語話者は上級にもかかわらず、母語話者と異なるスピーチレベルの選択やシフトをすることがある。しかし、重要なのは、非母語話者が母語話者と異なる言語行動をとることを結論づけるのではなく、相互行為におけるスピーチレベルシフトのプロセスの全て、即ち、母語話者と異なるスピーチレベルシフトがどのような機能を持っているかの説明である。そのため、まずは、非母語話者の全体活動フレームにおける on stage の発話に現れるスピーチレベルの選択及びそのシフトの機能をグループごとに述べていく。

グループ2の F2 と F6 の基本スピーチレベルは「+レベル」である。全体活動フレームにおける on stage の発話事例3と4(p.26, 27)では、スピーチレベルが一定の「+レベル」に保たれており、「0レベル」へのシフトが観察されない。F2 と F6 は on stage の場合、同様の発話パターンを提示する、と言える。言い換えれば、F2 と F6 は on stage であることを意識し、スピーチレベルをシフトしないということを knowledge schema としてもっていると同時に、それを応用できるのである。これを裏付けるものとして、グループ2の2人は、off stage になると、on stage における一定の「+レベル」と違って、様々な要因の影響を受けてスピーチレベルシフトをすることが発話例で確認された。

一方、グループ1の F1、F3 と F4 の3人の基本スピーチレベルは「0レベル」である。全

体活動フレームにおける on stage の発話事例 1 と 2 (p.25、26) では、語りの始めの部分には「+レベル」が使用されることがわかる。しかし、この「+レベル」は最後まで保たれず、最初の文や数文にしか出現しなくて、また「0レベル」にシフトする傾向が観察された。最後の文や数文に「+レベル」が再出現することが事例 1 と 2 を見ても明らかである。即ち、グループ 1 の 3 人の全体活動フレームにおける on stage の発話には、発話アドレスが全体に向けられているのにも関わらず、「+レベル」「0レベル」「+レベル」のようなレベルシフトのパターンが観察された。

では、なぜ「0レベル」が基本レベルであるグループ 1 の 3 人は語りの最初と最後の部分にだけ「+レベル」に切り替えるのだろうか。全体活動フレームにおける on stage の発話の場合、発話アドレスが全員に向けられているため、1対1の対話や小人数の話し合いとは発話状況が異なる。グループ 1 の非母語話者は、on stage frame であることを knowledge schema として持っている。その結果、「+レベル」を用いて全員に向けて話題提供や語りを始める。いわば、「+レベル」は指標的なものであり、on stage frame における発話であることをメタメッセージとして使用している、と言える。母語話者が一定の「+レベル」を使用することによって、on stage であることをメタメッセージとして伝えるのと同じように、グループ 1 の非母語話者は語りの最初と最後を「+レベル」で括ることによって、スピーチレベルに「全体に向けての発話」という機能をもたせており、1つのコミュニケーションストラテジーとして使用している、と考えられる。

また、語りの最初と最後の部分に「+レベル」を用いるということは、on stage frame における一定の「+レベル」しか使えないことを knowledge schema として持っている可能性を示している。なぜなら、off stage の会話事例では、会話の途中「+レベル」への逸脱は観察されたが、on stage における発話のように、会話が少々長くても最初と最後の部分が「+レベル」で括られている例は観察されていない。では、なぜ on stage における発話の最初の部分の「+レベル」から「0レベル」にシフトするのだろうか。先にも述べたように、F1、F3 と F4 の基本スピーチレベルは「0レベル」である。つまり、グループ 1 の非母語話者は年齢などのような社会的コンテクストは関係なく、母語話者と会話をする際、「0レベル」を選択する。彼らが「+レベル」から基本の「0レベル」にシフトする理由は、on stage frame の特徴にあると思われる。On stage frame とは、話題提起者が全員に向けて問題に感じていることや話題提起をする。聞き手全員の視線や集中力が話題提起者に集まる。また、非母語話者は、小グループ活動の材料ともなる話題提起を全員がわかるよう語らなければならないのである。これは普通の会話と異なり、内容の伝達が重要となる。結果として、聞き手全員が注目する「内容」の伝達のこととなると、実生活でも使うことに慣れている「0レベル」を用い、内容伝達に注目し、それを優先すると考えられる。

では、様々な要因がスピーチレベルシフトに影響すると思われる off stage の場合はどうだろうか。

3.3.2 Off stage の場合

Off stage とは、全員に聞かせる発話ではなく、個人的な質問や受け答え等をする時の発話のことである。Off stage におけるスピーチレベルシフトは様々な要因が同時に発話に影響することから生田・井出が指摘する 3 つの要因、社会的コンテキスト、話者の心的態度と、談話の展開の観点から非母語話者のスピーチレベルシフトを検証した。母語話者の場合、これらの 3 つの要因でスピーチレベルシフトは説明できるが、非母語話者の場合この枠組みでは説明仕切れない部分があるため、Power relations の要因を用い、説明を試みた。Off stage の発話事例では、以上の 4 つが非母語話者のスピーチレベルシフトにどのように影響するのを見てきた。ここでは、非母語話者のスピーチレベルシフトが談話進行上どのような機能を果たしているのかを考察する。

の社会的コンテキストでは、年齢とスピーチレベルシフトの関係を検証した。母語話者の場合、社会的要因の中でも年齢の影響が性より強く、年上に対して「+レベル」が用いられ、また、年下との会話の場合「-レベル」が多く観察された、と Hashimoto (1992) は述べている。では、非母語話者の場合はどうだろうか。基本レベルが「+レベル」であるグループ 2 の非母語話者の場合は母語話者同様、年上の母語話者に対し、一時的な「0レベル」への逸脱があっても、「+レベル」が基本レベルとして使用されていることは事例 8 (p.31) を見ても明らかである。年齢が同等 (事例 9、p.32) や年下が相手の場合 (事例 10、p.32、33) 「0レベル」が基本レベルとして用いられることが多いが、「+レベル」の使用も観察された。しかし、こういった「+レベル」へのシフトは、話者の心的態度の変化や談話の展開の標識を示すためのものとして解釈された。つまり、グループ 2 の非母語話者は、母語話者の年上の相手に対して「+レベル」が用いられることを knowledge schema としてもっていると言える。また、年齢が同等や年下の場合、いつも「+レベル」を持ち続けると、距離をおいて話しているように見受けられることから「0レベル」を用いたのではないかと考えられる。では、グループ 1 の場合はどうだろうか。

基本レベルが「0レベル」であるグループ 1 の F1、F3 と F4 は、年齢とは関係なく、「0レベル」を基本レベルとして用いることが一つの特徴として観察された。彼らの発話データからは、年上の母語話者に対し一貫して「+レベル」の使用は観察されなかった (事例 5、p.29、30)。その理由としては、3 人とも年上に対し「+レベル」を使用するというものを knowledge schema として持っていない可能性が考えられる。厳密に言えば、教室における日本語学習の経験がないこと、いわば、3 人ともが自然習得者であることと、年上の母語話者と接触がないことから、年上に対する用いるスピーチレベルが knowledge schema に存在しない、と思われる。自然習得者であるグループ 1 の 3 人は、年上に対して「+レベル」が使用されることを教わったことはなく、このような日本語の知識は母語話者とコミュニケーションを通して習得してきたのである。また、実生活の中でも、年上の母語話者との接触場面をあまり経験していないことから年上の母語話者に対する使用される「+レベル」

も knowledge schema として持っていない、と考えられる。

一方、話者の心的態度の場合はどうだろう。1つの談話を通して言語主体の心理、或いは相手に対する態度は常に一定であることは限らない、と生田・井出は指摘する。つまり、談話の中で話の素材となっている人物や事柄は談話の流れの中で徐々に変化するものであるから、相手に対する心的距離も変化する。母語話者は、スピーチレベルをシフトさせることによって心的距離を表明するのである。本研究の対象となった上級非母語話者の発話データからも、心的距離の変化を示すスピーチレベルシフトが観察された。

話者の心的態度を心的距離の短縮を示す例と心的距離の伸長を示す例の2つに分けて検証した。基本レベルが「+レベル」であるグループ2は、事例12(p.34、35)を見てもわかるが、「+レベル」から「0レベル」にシフトすることで心的距離の短縮を示す。この事例のようなシフトは場の緊張した雰囲気や和らげ、話し相手の母語話者との共感度を高める機能をもっていると言える。これは母語話者と同様のパターンである。グループ2のF2の発話データには、心的距離の伸長とも解釈される例がいくつか観察されたので、その1つを事例13(p.36、37)として提示した。事例13ではJ6が「日本人」と「日本人でない人」という2つの対立関係を話の内容に持ち込んだことに対してF2は「+レベル」で心的距離の伸長をはかったように見える。これは Power relations にも関係があると思われることから、後で詳しく述べる。グループ2スピーチレベルシフトを心的態度の観点から検証すると、彼らは、心的距離をスピーチレベルシフトによって短縮したり、伸長したりできることを knowledge schema としてもっており、それを一つのコミュニケーションストラテジーとして応用しているように見える。

一方、基本レベルが「0レベル」であるグループ1の場合、相手に対する同調や支持などの気持ち、いわば、心的距離の短縮を表すために「0レベル」から「+レベル」にレベルシフトをする。これは母語話者やグループ2の非母語話者が用いるストラテジーとは異なるが、彼らは基本レベルとして「0レベル」を用いるので心的距離の短縮を表すためのストラテジーとしては「+レベル」にシフトするしかない、と考えられる。換言すれば、同調や支持などの気持ちを基本レベルと異なる「+レベル」にシフトすることによって表すことができるのである。事例11(p.34)を見ても、彼らの支持と同調のストラテジーとしての「+レベル」へのシフトは明らかである。しかし、ここで注目すべき点が1つある。それは、グループ1の母語話者との発話データには、心的距離の伸長を表すような発話は観察されなかったが、非母語話者同士の発話においては同様の例がいくつか確認できたことである。その理由としては、母語話者と非母語話者の相互行為における power relations の存在が関係していると考えられる。これについても Power relations のところに詳しく述べる。結果として言えることは、グループ1の非母語話者はスピーチレベルをシフトさせることによって心的距離の短縮を表すことができることを knowledge schema としてもっているが、「0レベル」を基本レベルとして用いる彼らには「+レベル」にシフトするほかない、

と言える。

次に、談話の展開を表すスピーチレベルシフトを見る。話者の頭の中には下位区分としてまず、文法的な文の概念よりもむしろ、内容的に統一のとれた1まとまりのいわば、「小話題」がいくつかあって、その組み合わせによって談話が構成される、と言われている（生田・井出 1983）。このような下位区分は談話の「ユニット」と呼ばれている。母語話者は1つの談話ユニットから違う談話ユニットへの移行をスピーチレベルのシフトによって表すこともある。本研究では、談話の展開を「質問する時」と「話題の変換の標識として」の2つの下位分類に分けて検証した。談話の展開の事例（14 - 17、p.38 - 41）を見てもわかるように、非母語話者も母語話者同様、談話の展開をスピーチレベルをシフトシフトさせることで提示する。

グループ2のF2とF6は、質問する時は年上に対し（事例 15、p.38、39）「+レベル」を基本レベルとして用いるため、「0レベル」にシフトする。また、年齢が年下や同等の母語話者と会話をする際、「0レベル」を基本レベルとして用いるため「+レベル」にシフトすることが観察された。また、話題変換の標識としてのシフトだが、事例 17（p.40、41）を見てもわかるように、年齢が同等や年下の場合、「+レベル」へのシフトが用いられる。一方年上に対し、話題変換としてのシフトは観察されなかった。つまり、談話の展開を表すためにスピーチレベルシフトしていることが明らかであり、また、そのパターンも母語話者と同じである、と言える。

他方、グループ1のF1、F3とF4は基本レベルが「0レベル」のため、質問する時も、話題の変換の標識を示すため「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせる。つまり、談話の展開の機能をスピーチレベルシフトに持たせているということは、knowledge schemaとして持っていることになるが、基本レベルが「0レベル」であるため、レベルシフトによって何か伝えようとすると、「+レベル」にシフトするしかないことになる。

今までは、生田・井出のスピーチレベルシフトの3つの要因枠組みを借りて、非母語話者のスピーチレベルシフトを説明してきた。しかし、この枠組みでは、非母語話者のスピーチレベルシフトの全てを説明することはできない。そこで本研究では、母語話者と非母語話者の双方のことに影響を及ぼし、相互行為においては無視できない要因の一つとして power relations の観点から非母語話者のスピーチレベルシフトを検証した。

‘All relations are power relations’ という Foucault、M.(フーコー) の言葉がある。その言葉通り、母語話者と非母語話者の間も power relations は存在する。この Power relations にも述べたが、それは主に、母語話者の日本語・日本文化についての knowledge schema と非母語話者が持つその knowledge schema の違いを指す。このような divergent knowledge schema が母語話者と非母語話者の相互行為における power dynamics が生じる原因の1つにもなる。そして、結果としてそれが両者の発話に反映される。

本研究では非母語話者のスピーチレベルシフトは power relations がどのように現れて

いるのかを .日本語が評価された時、 .「日本」が強調される時、 .日本語・日本文化について尋ねる時と、 .日本語が理解できない時の 4 つから検証した。結果として、 と は、母語話者の発話内容が原因でスピーチレベルシフトが起こる。例えば、事例 18(p.43、44) では、母語話者数人が F3 の日本語についてよい評価をする。基本レベルが「0 レベル」である F3 が「+レベル」にシフトすることによって、評価への感謝の気持ちを表している。また、これは F3 が話した「日本語」ではなく、F3 が着ている「洋服」への評価に対しては、F3 はスピーチレベルをシフトしないことが他の例で観察された。結果として、このシフトは「日本語が評価された」ことに対するシフトである、と考えられる。

「日本」という「特殊性」が強調された場合も同じである。事例 21(p.45) では、J4(70 代) が「本当の日本人」という特殊性を強調したため、J4 に対し「+レベル」を使用する F2 が、「じゃ、先の三人は本当の日本人じゃない? 」と「0 レベル」を使用することによって J4 に対する不満や距離をあらわにする。その不満の気持ちは、F2 の発話内容によっても伝わってくる。事例 13(p.36、37) は、心的距離の伸長の例だが、年齢が同等である J6 に対して F2 は「+レベル」を用いる。そうすることによって、心的距離の拡大を示す。

.の日本語・日本文化について尋ねる時と、 .の日本語が理解できない時は非母語話者の発話内容が原因でスピーチレベルシフトが起こる場合である。わかりやすく言えば、母語話者の発話行動が非母語話者のスピーチレベルをシフトさせるのではなく、非母語話者自身が、日本語や日本文化について尋ねる時(事例 20・21、p.45) は「0 レベル」で話をしていても「+レベル」にスピーチレベルをシフトさせることが観察された。また、日本語が理解できない場合(事例 22、p.45、46) も、「+レベル」にシフトさせることが観察された。つまり、道や料理の作り方を尋ねる時はスピーチレベルをシフトさせないが、日本語・日本文化のこととなると「+レベル」を使用する。日本語が理解できない場合も、話し相手の母語話者に対して「0 レベル」を用いて話している非母語話者は「+レベル」にシフトすることが観察された。その理由としては、divergent knowledge schema の存在が関連していると考えられる。これは 3.1.1 の「分析の枠組み」で述べたように、医者と患者の divergent knowledge schema に例えられる。つまり、母語話者は母語(L1)としてもつ日本語の運用力と日本文化に対する知識は、非母語話者のもつそれとは異なる。故に、母語話者を相手に、日本で日本語を使用してコミュニケーションをはかっている非母語話者にとっては、言語上・文化上同等な立場ではない、と予測される。こういった非母語話者の発話内容が原因で生じる「+レベル」へのシフトは、日本語・日本文化についての知識や日本語が理解できない時にもっと容易な日本語で教えてもらえるための機能を果たしている、と考えられる。

以上、グループ討論場面の全体活動フレームにおける上級非母語話者のスピーチレベルおよびそのシフトやスピーチレベルシフトの機能を検証した。母語話者との相互行為において非母語話者はコミュニケーション上、様々なストラテジーを展開していることは明らかである。スピーチレベルシフトにおいても、グループ 1 の F1、F3 と F4 は自分なりのル

ールを作り、コミュニケーション妨害にならないようそれらのルールを巧みに使いこなしていると言える。

第4章 結論

4.1 結論

本研究は母語話者との相互行為における上級非母語話者のスピーチレベルシフト及びその機能を明らかにすることを目的とした。3.3の「考察」では、非母語話者がどのようにスピーチレベルシフトをコミュニケーションストラテジーとして用いるかを説明した。また、彼らが母語話者と異なる要因でスピーチレベルをシフトさせることとその要因も明らかにした。エスノメソドロジック的談話研究の方法論を用いることによって意義のあるものになったと考える。また、結果重視のアプローチで行われてきた接触場面におけるスピーチレベルシフトの先行研究に対して本研究では、現場重視のアプローチをとった。つまり、社会的コンテクストをトータルに捉える必要があると考えたからである。現場重視のアプローチの結果、on stage・off stage というフレームの概念を用いてスピーチレベルシフトを考察することができた。その結果、相互行為が生み出す日本語のスピーチレベルシフトに潜んでいる power relations の「事実」を示すことができた。このような社会的な事実を述べると同時に、非母語話者のスピーチレベルシフトが影響を受ける4つの要因、スピーチレベルシフトの機能、そして、母語話者と異なるスピーチレベルの選択及びそのシフトの実態の解明を目指した。以上の点を踏まえて、相互行為におけるスピーチレベルシフトの研究についての示唆と、日本語教育への示唆を述べたい。

4.2 今後への示唆

4.2.1 スピーチレベルシフトの研究への示唆

1. 非母語話者のスピーチレベルシフトに焦点を当てた研究の必要性

スピーチレベルシフトの研究に関して言えば、母語話者のスピーチレベルシフトのメカニズムを目指した研究がほとんどである。また、非母語話者がどのように母語話者のスピーチレベルシフトに近づけることができるかという課題を設定してきた。しかし、一方的に非母語話者に母語話者と同様のスピーチレベルのメカニズムを教え込むのではなく、非母語話者が用いるスピーチレベルシフトはどのようなものなのかの解明が必要である。換言すれば、非母語話者が用いるスピーチレベル及びそのシフトに焦点を当てた研究が必要とされている。このような研究こそが非母語話者のスピーチレベルシフトの実態を明らかにでき、日本語講師にとってその原則の指導の示唆にもなるだろう。

2. 研究のアプローチの検討の必要性

接触場面における先行研究は、想定された結果を得ることを目的として行われたものであるように見受けられる。このような目的のもとに行われた研究では、非母語話者が話すことばの言語形式にだけ注目することになり、なぜ母語話者と異なる形式が観察されるか、その説明はなされないままである。このような研究は一般に、社会構造の中の統計的な関係を探求していても、社会的な事実がどのように生み出されるかを考察するまでには至っていない。社会的な事実は言語に反映されるため、ことばのプロセスつまり、「どのように」に焦点を当てる必要があると思われる。

3. 対象現場の特徴を重視した研究の必要性

ことばは現場の状況に影響されるため、現場重視の研究が必要とされている。例えば、本研究の場合対象現場を細かく切ってみると、フレームの概念が大変重要な役割をもっており、スピーチレベルシフトに影響していると言える。また、母語話者と非母語話者の相互行為においては knowledge schema の概念が重要であり、divergent knowledge schema がスピーチレベルをシフトさせる場合があることが明らかになった。参加者のことばに影響すると思われるこういった概念は現場から生まれる。即ち、これらの概念は現場にある種の特異性を持たせており、それを研究に採り入れない限り真のことばのメカニズムを解明できない。スピーチレベルシフトの場合も同様である。

次に、本研究の分析結果の日本語教育への応用の可能性について述べる。

4.2.2 日本語教育への示唆

1. 母語話者と非母語話者の相互行為の現場を増やす必要性

本研究のグループ1のように「0レベル」を基本レベルとして選択する非母語話者はこの3人に限らないと考えられる。特に、on stage のようにあらたまった場面では一貫の「+レベル」を使用しなければならないときは、この3人は語りの最初と最後を「+レベル」で括るといふコミュニケーションストラテジーを用いる。そうすることによって聞き手全員に on stage であるというシグナルを送ると解釈できる。また、母語話者も非母語話者のこのようなコミュニケーションストラテジーに慣れる。よって、非母語話者の用いる「共生言語」(岡崎 2000) に対する理解が生まれ、双方がより円滑にコミュニケーションができるようになると考えられる。しかし、これは母語話者と非母語話者の相互行為の現場が可能にしたものと言える。実生活の中では双方のインターアクションの場が限られている。これからの日本社会を母語話者と非母語話者が共に作り上げるということを可能にするには、こういった相互行為の場を増やすことが日

本語教師の重要な役割と言える。

2. Power relations の存在についての自覚

本研究で述べたような母語話者と非母語話者の相互行為における power relations の存在を日本語教師が自覚しなければならない。そして、教育現場では学習者のみならず、母語話者にも power relations について自覚させる必要があると思われる。自覚することで初めて共生に向けての相手理解も生まれてくる。

4.3 今後の課題

本研究ではグループ討論場面を形式上、内容上の違いに基づき、全体活動と小グループ活動の2つに分けた。本研究では、全体活動に焦点を絞って非母語話者のスピーチレベルシフトを検証したが、形式や内容が全体活動と異なる小グループ活動においても非母語話者がどのようにスピーチレベルシフトをしているのか、またその機能は何なのかを明らかにする必要があると思われる。

非母語話者が母語話者と異なる要因でスピーチレベルシフトをすることも明らかとなった。そういった母語話者と異なるスピーチレベルシフトの解明も重要な課題である。なぜなら、それを解明することによって初めて母語話者と非母語話者の相互行為に潜んでいる「社会的な事実」が明らかになるからである。本研究で見てきた複雑なプロセスのほんの一部しかない、いわば、氷山の一角と言える。エスノメソドロジ的談話研究の方法論を用いて非母語話者のスピーチレベルシフトに焦点を当てた研究を重ねる必要があると思われる。また、最も習得が困難と言われているスピーチレベルシフトは、非母語話者のことばのプロセス、つまり「どのように」を解明することでこそその実態が明らかになる。それが結果として、どんな要因で母語話者と異なるスピーチレベルシフトシフトが起こっているかの説明が明らかになり、日本語教育への応用に繋がると確信する。

さらに、もっとも緊急で重要な課題は、母語話者と非母語話者の相互行為の現場を増やすことである。特に、日本国内の日本語教育の現場では、母語話者と非母語話者が共に参加することによって、非母語話者者だけではなく母語話者も学ぶことがたくさんあると言える。これを裏付けるものとして、母語話者の発話例¹をまとめると、

「私にとって、ストレス発散クラスだった。日本人同士よりはいろいろな考え方が聞けて、異文化交流ができてよかった。また、日本人同士だから楽だとか、考えが合っていていいとかは全然思わない。外国人だからかえって共感できるところがある。」

と続く。他方、1人の非母語話者のコメント²をまとめると、

「そこからはじまったのよ、今のヘルプセンターのところね。そこからはじめて自信持てたのね、だから話せるようになってる。逃げないよ今。前はわからない時はだまってる。今は「すみません、日本語何と
言うの、これ？」で、教えてくれる。前は、黙っていて、不安、怖い、怖い。心の苦しみがなくなったよ最近。
(省略)自分でも自信持たないと、と思ったの。そういう自身持てたから大丈夫ですよ。今のクラスはほとんど助かったところはいっぱいあるよ。言葉たりないけど私。」

になっている。以上の発話事例から言えるのは、日本という社会コンテキストの中で母語話者と非母語話者の相互行為がはじめて非母語話者の日本語に「意味」をもたせるのである。また、母語話者にとっても、異なる文化や母語を持っている人達が話す日本語、いわば、共生言語に対する理解が生まれ、日本社会をもっと豊かにしていく、と言えるのではないだろうか。

¹ この発話事例は、2001年4月のインタビューからとったものである。

² この発話事例は、2001年4月のインタビューからとったものである。

参考文献

<和文>

- 1) 阿部圭子 (1998) 「談話研究におけるデータの活用について ビジネス談話データの事例から」『複雑化社会のコミュニケーション』日本語学 9 月臨時増刊号 42 - 51
- 2) アランクロン (1996) 山田富秋、水川喜文訳『入門エスノメソドロジー』せりか書房
- 3) 生田少子・井出羊子 (1983) 「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12 - 12、大修館書店
- 4) 上仲 淳 (1997) 「中上級日本語学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト - 日本語母語話者との比較考察 - 」『日本語教育論文集 - 小出詞子先生退職記念』凡人者
- 5) 宇佐美まゆみ (1993a) 「初対面に者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の力関係による相違 日本語の場合」『ヒューマン・コミュニケーション研究』日本コミュニケーション学会、第 21 号：25 - 40
- 6) 宇佐美まゆみ (1994) 「性差か力 (POWER) の差か：初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より」『ことば』15：53 - 69 現代日本語研究会
- 7) 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用：スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』第 662 号、27 - 42 昭和女子大学近代文化研究科
- 8) 宇佐美まゆみ (1998) 「ディスコース・ポライトネスストラテジーとしてのスピーチレベルシフト」『日本語教育学会秋季大会予稿集』
- 9) 岡崎眸 (2001) 「多言語・多文化を切り開く日本語教育」『多言語・多文化を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』お茶の水女子大学日本語教育コース
- 10) _____他 (2001) 『多言語・多文化を切り開く日本語教員養成 日本語教育実習を振り返る』お茶の水女子大学日本語教育コース
- 11) 岡本能里子 (1997) 「教室談話における文体シフトの指標的機能 丁寧体と普通体の使い分け」『日本語学』16.3、39 - 51
- 12) OHRI RICHIA 他 (印刷中) 「多文化共生を目指した継続的対話の場の試み」『お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本語学シンポジウム』
- 13) 窪田富男 (1990) 『敬語教育の基本問題 (上)』国立国語研究所
- 14) 熊取谷哲夫 (1994) 「メタメッセージと母語話者・非母語話者の談話行動」日本研究京都会議配布資料
- 15) 佐藤勢紀子 (2000) 「日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構」『平成 10 年度～平成 11 年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (C)(2)』東北大学留学生センター
- 16) 杉山ますよ (2000) 「学生の討論におけるスピーチレベルシフト 丁寧体と普通体の現れ方」『別科論集』第 2 号大東文化大学別科日本語研修課程

- 17) Stubbs, M. (1983) (南出康世・内田聖二共訳『談話分析 - 自然言語の社会言語学的分析 - 』研究者 1989)
- 18) 西阪仰 (1997)『相互行為分析という視点：文化と心の社会的記述』金子書房
- 19) ネウストプニー、J.V.(1982)『外国人とコミュニケーション』岩波新書
- 20) Bakhtin, M.M (1979) (佐々木 訳「ことばのジャンル」『ことば対話テキスト』新時代社 1988)
- 21) 三牧陽子 (1996)「待遇レベル・シフト」『言語教育の領域』大学書林
- 22) 三牧陽子 (2001)「対話における待遇レベル管理の実証的研究」『平成9年度～平成12年度研究成果報告書』大阪大学留学生センター
- 23) 南不二男他 (1974)「敬語の体系」『敬語講座 敬語の体系』明治書院
- 24) 南不二男 (1987)『敬語』岩波新書
- 25) 森下雅子 (1998)『制度的な相互行為 - 日本語ボランティアグループのミーティング - 』お茶の水女子大学大学院日本語教育コース 修士論文
- 26) 茂呂雄二編 (1997)「発話の型」『対話と知』新曜社 47 - 75

<英文>

- 1) Bateson, G. (1954) A theory of play and fantasy. *Steps to an ecology of mind*, 177-93. New York: Ballantine
- 2) Bellman, B. (1975) *Village of curers and assassins*. The Hague, Netherlands: Mouton
- 3) Bellman, B. (1984) *The language of secrecy*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press
- 4) Bittner, E. (1974) The concept of organization. *Social Research* 32, 239-255
- 5) Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness; Some universals in language usage*. Cambridge University Press
- 6) Chaff, W. (1977) Creativity in verbalization and its implications for the nature of stored knowledge. *Discourse production and comprehension*, ed. by Roy Freedle, 41-55. Norwood, NJ: Ablex
- 7) Fairclough, N. (1989) *Language and Power*. UK: Longman
- 8) Fillmore, C. (1975) An alternative to checklist theories of meaning. *Proceedings of the First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 123-132. Berkeley, CA: Linguistics Dept., Univ. of California, Berkeley
- 9) Fillmore, C. (1976) The need for frame semantics within linguistics. *Statistical Methods in Linguistics*, 5-29. Stockholm: Skriptor
- 10) Frake, C. (1977) Plying frames can be dangerous: Some reflections on methodology in cognitive anthropology. *The Quarterly Newsletter of the Institute for Comparative Human Cognition* 1:1-7
- 11) Garfinkle, H. (1967) *Studies in ethnomethodology*. Cambridge, Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall
- 12) Goffman, E. (1974) *Frame Analysis*. New York: Harper and Row
- 13) Goffman, E. (1981) *Forms of Talk*. Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press
- 14) Gordon, C. (1980) *Power/Knowledge, Selected interviews and other writings 1972-1977 by Michel Foucault*. Harvester Press
- 15) Hashimoto, I. (1992) *The function of honorifics as Japanese conversational strategy*. BA Thesis, Japan Womens University
- 16) Heidegger, M. (1962) *Being and Time*. New York: Harper and Row
- 17) Hinds, J. (1982) Japanese Conversational Structure. *Lingua*, Vol. 57
- 18) Hymes, D. (1974) Ways of speaking. *Explorations in the ethnography of speaking*, ed. by Richard Bauman and Joel Sherzer, 433-451. Cambridge: Cambridge Univ. Press
- 19) Ide, S. (1989) Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua*, 8-2/3 223-248 Mouton de Gruyter

- 20) Ikuta, S.(1983) Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Sciences*, Vol.5, No.1.37-53
- 21) Klienman, A. (1980) *Patients and healers in the context of culture: An exploration of the borderland between anthropology, medicine and psychiatry*. Berkley, CA: Univ. of California Press
- 22) Labov, W.(1972) The Study of Language in its Social Context. *Sociolinguistic Patterns*. Univ. of Pennsylvania Press
- 23) Matsumoto, Y.(1989) Politeness and conversational universals observations from Japanese. *Multilingua*, 8-2/3 207-221 Mouton de Gruyter
- 24) Mehan, H. (1978) Structuring school structure. *Harvard Educational Review*, 48 (1), 32-64
- 25) Mehan, H. (1979) *Learning lessons: Social organization in the classroom*. Cambridge, MA: Harvard University Press
- 26) Minsky, M.(1975) A framework for representing knowledge. *The psychology of computer vision*, ed. by P.H Winston, 211-277. New York: McGraw Hill
- 27) Mishler, E.(1984) *The discourse of medicine: Dialectics of medical interviews*. Norwood, NJ: Ablex
- 28) Moerman, M.(1968) Accomplishing ethnicity. *Ethnomethodology*, ed. by R. Turner, 54-68. Harmondsworth: Penguin
- 29) Roberts, C. Davies, E. (1992) *Language and Discrimination, A Study of Communication in Multiethnic Workplaces*. UK: Longman
- 30) Sacks, H. (1964-72/1992) *Lectures on Conversation*. 2Vols. Oxford: Basil Blackwell
- 31) Schegloff, E.(1968) Sequencing in conversational openings. *American Anthropologists*, 70
- 32) Sinclair, J., Coulthard, R.(1975) *Towards an analysis of discourse: The English used by teachers and pupils*. Oxford Univ. Press
- 33) Tannen, D.(1993) *Framing in Discourse*. New York: Oxford University Press
- 34) Thomas, L., Warieng, S.(1999) *Language, Society and Power*. London: Routledge
- 35) Watanabe, S.(1993) Cultural Differences in Framing: American and Japanese Group Discussions, in Tannen, Deborah ed. *Framing in Discourse*, New York: Oxford University Press
- 36) Watts, R.J., Ide, S., Ehlich, K.(1992) Politeness in Language: Studies in its history, Theory and Practice. *Trends in Linguistics*)